熊本県立装飾古墳館　平成15年度後期企画展示

肥後の至宝展Ⅱ

球磨楽展

～球磨の考古と歴史に遊ぶ～

清らかな川が流れ
山懐に抱かれる
球磨
どこまでも透きとおる光の中に
人びとの営みがあふれる
神秘と魅惑がすむ
奥深い考古と歴史は
人々を魅了する
球磨を遊び、球磨に学ぶ
そんな
球磨を楽しむ旅にでてみませんか

開催に当たって

熊本県立装飾古墳館では、『肥後の至宝展』と銘打つ展覧会を本館の企画展示として平成14年度からシリーズ化しました。このシリーズは、県内外からの来館者の方々に熊本の優れた考古資料等を紹介し、熊本の歴史のすばらしさを実感していただくための展覧会です。平成14年度は、「新発見・再発見　菊池川の古代遺跡」というテーマで、東鶴遺跡や木柑子古墳、柳町遺跡などの発掘調査の成果を紹介しました。

平成15年度は、この成果を受けて『肥後の至宝展Ⅱ 球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』として開催いたします。

球磨は、清らかな川が流れ、山懐に抱かれる自然環境の中で、10万年前から今日まで、数多くの文化財が遺されてきました。これらの文化財にはさまざまな考古資料や民俗資料、歴史資料が含まれていますが、中でも、先土器時代から江戸時代までの、数多くの遺跡の調査は、目を見張るものがあります。

今回の企画展示では、こうした豊富な調査の成果を基に、そこで出土した考古資料の中から、川辺川流域の遺跡で見つかった縄文時代中期から後期にかけての土器や石器、本地方の弥生文化を代表する免田式土器などの中から優品を選りすぐり、展示しました。また、「球磨に生き、球磨で学び、そして球磨を深く愛した」歴史研究者高田素次先生と、先生に係わった数多くの研究者との触れ合いなどを、関連する資料を交えて紹介しました。

そんな球磨の考古と歴史の豊さ、奥深さなど、その魅力を感じていただきながら、皆様の故郷へ寄せる思いや郷土愛を再度温めなおしていただく機会になればと思います。

最後になりましたが、本企画展示の開催に当たりまして、展示資料の提供に御理解と御協力をいただきました、高田睦子様、高田剣様、小屋松硬子様、原田正史様、熊本市立博物館、人吉市教育委員会、水上村教育委員会、相良村教育委員会、五木村教育委員会、山江村教育委員会、あさぎり町教育委員会、城南町教育委員会をはじめとした多々の方々、記念講演会での講師を快くお引き受けいただきました、渋谷敦様、前田一洋様に対して、厚く御礼申し上げます。

平成16年1月18日

熊本県立装飾古墳館長　古　澤　哲　男

例　言

1 本書は、平成15年度企画展示『肥後の至宝展Ⅱ　球磨楽展～球磨の考古と歴史に遊ぶ～』の展示解説図録である。

2 本企画展示では、球磨川流域の先土器時代から江戸時代までの遺跡を対象としている。

3 展示資料は、川辺川流域の相良村野原遺跡、五木村逆瀬川遺跡などで見つかった縄文時代中期・後期の土器や石器、あさぎり町本目遺跡、錦町夏女遺跡などで見つかった弥生時代後期の免田式土器など、本地域で見つかった考古資料の中、優品を選び出した。また、本地域を戦前から研究し、その文化の特徴を明らかにしてきた高田素次氏に注目して、その研究の１コマとそれに係わった研究者を紹介した。

4 本書の執筆については、学芸課木﨑康弘が行った。また、原田正史から玉稿をいただいた。さらに、高田睦子氏の御好意により、高田素次氏の著作より転載したものも含んでいる。
なお、提供を受けた文章については、関係箇所毎に、その出典を明示している。

5 本書に掲載した写真資料については、各市町村教育委員会から提供を受けたもの、報告書等から転載したもの、本館学芸課で撮影したものがあるので、掲載写真毎に、その提供先を明示している。

6 本書の編集については、学芸課の協力を得ながら、木﨑がこれにあたった。

目　次

開催に当たって ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

例　言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

目　次 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

ゾーンⅠ「プロローグ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

ゾーンⅡ「球磨に遊ぶ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

コーナー1「活きる」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

活きる6／　逆瀬川に活きた縄文人8／　逆瀬川ムラの舞台8　川に活きる、森に活きる12／網漁と道具12　木工と道具13　狩りと道具13　ドングリ類と道具14　逆瀬川ムラでの暮らし14／野原ムラに活きた縄文人15／　野原ムラの舞台15　川に活きる、森に活きる20／　網漁と道具20／木工と道具20　野原ムラでの暮らし21／　小浜ムラに活きた縄文人22　谷間のムラムラ22／人々はたくましく活きる23／　余話　山中の豪族たち24

コーナー2「祭る」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

祭る25／　免田式土器いろいろ25　免田式土器～ムラで祭る、ハカで祭る～26／　夏女ムラの舞台27　夏女ムラの免田式土器31／　墓地が築かれた時代32　ハカと免田式土器と供え物35／祭りいろいろ36／　石に記された祭りの証し36　縄文の祈り37　祭りの原型38　人々は何を求めるか38／

コーナー3「集う」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 39

集う39／　五木を越えて40　市房を越えて41　加久藤・大口を越えて43　人々はどこを向く43／

ゾーンⅢ「球磨に学ぶ～ある考古学者の軌跡～」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44

『球磨上代文化資料集成（十三年三月十日刊）』に見る高田素次の原点の意志表示45／ある考古学者の軌跡46／　遺跡は感動だ！47／　土器片47／　浜田博士の詫び証文48／ことの発端49　浜田博士の詫び証文49　集う考古学者50／　小林久雄と頭地下手遺跡50／坂本經堯と水上村千人塚51　偶然との出会いを大切に～石清水式土器発見秘話～52／石清水式土器とは？52／　一尺の差53／　郷土に誇りを持とう～免田式土器登場秘話～54／考古学者大集合～東京考古学会～55　なぜ旧石器は残った～旧石器発見秘話～56／イモゴ層の下から57／　深田小学校裏手崖産出の旧石器について58／　自分の郷土に感動しよう59／　高群逸枝のこと59

ゾーンⅣ「エピローグ」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 60

「球磨楽展」関係略年表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61

出品目録 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

参考文献 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67

ゾーンI「プロローグ」

古代。球磨人の風貌は、

「肥人の　額髪結へる　染木綿の　染みにし心　我忘れめや」（萬葉集2496）

と詠われていますように、京の貴族たちに深い印象を与えていました。しかし、それは粗野な身なりだったからではありません。おそらくは、恋人をいとおしく思うほどに、球磨人の姿は魅惑的であったに違いありません。

球磨は古来「求麻」とも書きました。

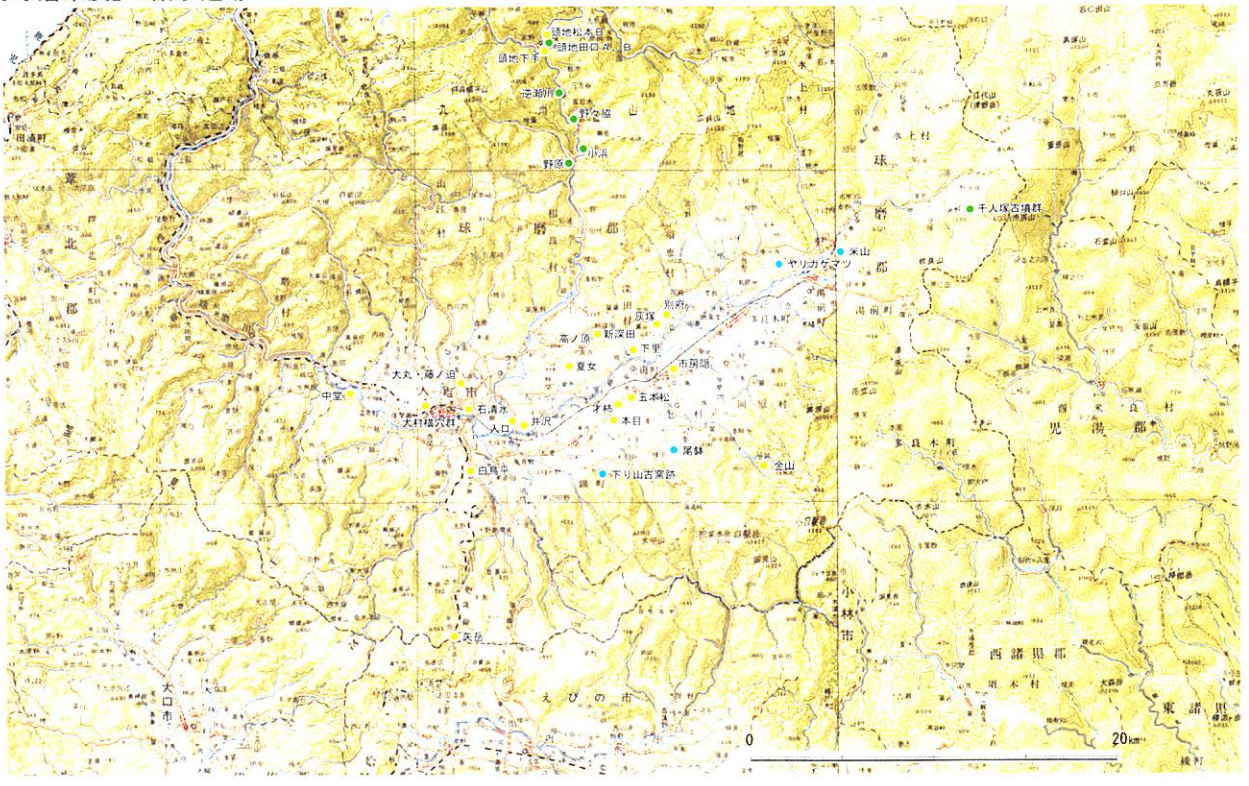
球磨川下流を流れる麻布を拾い上げた人がいました。彼は、きっと上流には人々が暮らしているはずだと直感し、川を遡ることにしました。行けども行けども険しい山間の渓流。あきらめかけたその時です。眼前に広い平野が開けました。人々の営みがそこここに溢れた豊かな土地に至ったのです。以後、この地を「求麻」と呼ぶことになったともいわれています。桃源郷にも例えられる球磨の風土は、神秘的なのです。

そんな球磨には、古くから人々の営みがありました。

彼らは、川沿いのムラに、山間のムラに、山中のムラに、そしてそれらを取り巻く自然の中に、日々の暮らしを求めていました。あたかも閉じられた空間のような人吉盆地や九州山地の中で、彼らは、たくましく、そして祈りに満ち溢れていました。しかし、そこは、けっして閉じられた空間ではありません。多くの人が行き交い、さまざまな文物が流れ込む、開かれた空間なのです。そのことを球磨の考古と歴史は教えてくれています。

そんな球磨の考古と歴史の旅に出てみましょう。

『球磨楽展』で扱う遺跡



ゾーンⅡ「球磨に遊ぶ」

熊本県の南部にある球磨。そこは、人吉盆地とそこを取り巻く九州山地の山々を含み、広大な面積を占めた地域です。

国見山や市房山など、1700m級の山々が豊かな森を育みながら連なる、奥深い地形の九州山地。そこには、球磨川や川辺川などの河川がV字形の深い渓谷を作りながら、網の目のように走っています。

九州山地の中に大きく口を開けた、標高100m～200mの断層盆地の人吉盆地。そこには、「日本三急流」の1つ、球磨川が九州山地から流れ出た河川を取り込みながら、東から西へと流れ下っています。

球磨は、奥深い地形と共に「平家落人伝説」、「五木の子守唄」、寺社仏閣が残されるなど、神秘的で哀愁に満ちた雰囲気を醸し出しています。そんな雰囲気の中、球磨を訪れた人々は、旅愁を感じるのかもしれません。

「球磨に遊ぶ」では、そんな球磨の考古と歴史を「活きる」、「祭る」、「集う」という3つの切り口で紹介し、それらの持つ魅力を感じていただきます。

活きる

祭る

集う

コーナー1「活きる」

球磨。

そこは、肥沃な平野、奥深い山地、清らかな河川など、豊かな自然に育まれた所。人々は、そこでたくましく活きてきました。そんな人々の暮らし、中でも川辺川沿いでの人々の暮らしをのぞいてみましょう。

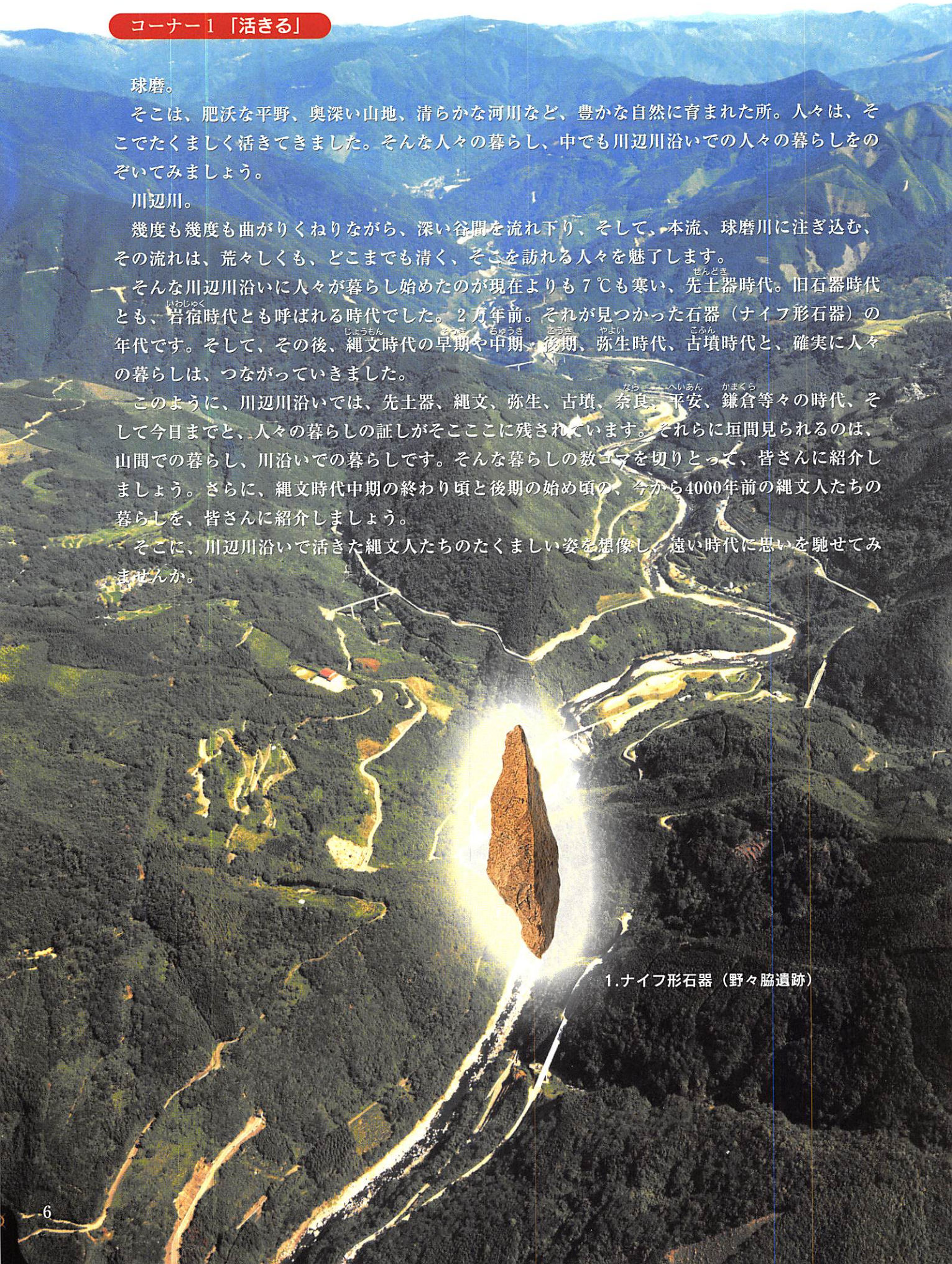
川辺川。

幾度も幾度も曲がりくねりながら、深い谷間を流れ下り、そして、本流、球磨川に注ぎ込む、その流れは、荒々しくも、どこまでも清く、そこを訪れる人々を魅了します。

そんな川辺川沿いに人々が暮らし始めたのが現在よりも7℃も寒い、先土器時代。旧石器時代とも、岩宿時代とも呼ばれる時代でした。2万年前。それが見つかった石器（ナイフ形石器）の年代です。そして、その後、縄文時代の早期や中期、後期、弥生時代、古墳時代と、確実に人々の暮らしは、つながっていきました。

このように、川辺川沿いでは、先土器、縄文、弥生、古墳、奈良、平安、鎌倉等々の時代、そして今日までと、人々の暮らしの証しがそこここに残されています。それらに垣間見られるのは、山間での暮らし、川沿いでの暮らしです。そんな暮らしの数コマを切りとって、皆さんに紹介しましょう。さらに、縄文時代中期の終わり頃と後期の始め頃の、今から4000年前の縄文人たちの暮らしを、皆さんに紹介しましょう。

そこに、川辺川沿いで活きた縄文人たちのたくましい姿を想像し、遠い時代に思いを馳せてみませんか。



1.ナイフ形石器（野々脇遺跡）

2.岩本式土器（頭地田口Ａ遺跡）

3.尖底無文土器（頭地田口Ａ遺跡）
写真提供：熊本県教育委員会

4.壷（頭地田口Ｂ遺跡）

5.壷（頭地田口Ｂ遺跡）

6.台付甕（頭地田口Ｂ遺跡）

7.高杯（頭地田口Ｂ遺跡）

逆瀬川ムラに活きた縄文人

ここで紹介します逆瀬川ムラは、球磨郡五木村の逆瀬川遺跡で見つかりました。今からおよそ4000年前の、縄文時代中期の終わり頃から後期の初め頃にかけての縄文ムラでした。調査は、そこが川辺川ダムによって水没することから計画され、1999年11月から2000年10月までの約1年間をかけて行われました。担当は、五木村教育委員会でした。

調査では、竪穴式住居跡という当時の家の跡５基が見つかりました。いずれも直径4mの円い形をした家の跡で、中央に炉を置いた家もありました。また、土器や石器という当時の道具もたくさん見つかりました。

この縄文ムラで目をひくのは、ムラが置かれた土地です。なんと、逆瀬川ムラは、川辺川のすぐ脇の、谷底で見つかったのです。ここは、家が造られた地面が砂地であることから分かるように、川辺川の水に流されやすい土地です。こんな土地に縄文人たちがムラを置いたということは、山間でたくましく活きた縄文人たちの姿を想像させてくれ、とても興味深いものがあります。

写真提供：五木村教育委員会

逆瀬川ムラの舞台

逆瀬川ムラは、縄文時代中期の終わり頃から後期の初め頃にかけての縄文ムラです。見つかった土器では、後期の出水式土器が多く、これについで後期の市来式土器や南福寺式土器、中期の阿高式土器などがあります。それらの年代は、今からおよそ4000年前と推定されていますが、それは、放射性炭素の量を計測してわりだした年代、4210年前、3810年前でも確かめられました。

見つかった土器の多くには、まだ乾いていない土器の表面に棒の先を押し付け、すぐに引き上げたり（刺突文や連点文）、そのまま引いたり（沈線文）して付けた文様があります。文様の付け方も、長く引いたり、短く終わったり、丸みを持たせたり、それらを組み合せたりなどなど、さまざまです。シンプルな中にも、躍動的な表現を窺える土器です。

8.阿高式土器（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

9.阿高式土器（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

10.南福寺式土器（逆瀬川遺跡）

11.出水式土器（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

12.出水式土器（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

13.出水式土器（逆瀬川遺跡）

14.市来式土器（逆瀬川遺跡）

15.市来式土器（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

16.無文深鉢形土器（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

17.無文浅鉢形土器（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

18.鐘崎式土器（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

19.小型壷形土器（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

20.透し入り底部（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

21.特殊注口土器（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

川に活きる、森に活きる

逆瀬川ムラでは、……。

- 石錘は、魚取りの網の錘です。縄文人たちが盛んに漁労をしていたことが分かります。
- 磨製石斧は、木を切り倒したり、切り倒した木を加工したりする道具です。縄文人たちが盛んに木工をしていたことが分かります。
- 石鏃は、イノシシやシカなどの獣狩りをする時の矢の先に取り付けます。また、石匙は、獣の解体の時に使う道具です。縄文人たちが盛んに狩猟をしていたことが分かります。
- 磨石や石皿は、ドングリ類を粉にする時に使う道具です。縄文人たちが盛んに植物性の食料を集めていたことが分かります。

ところで、逆瀬川ムラは、川辺川沿いの、山間の谷底にあります。そこは、深いV字谷の谷底で、谷川を流れ下る水音がこだまする所。おそらく、縄文人たちの耳にもそうした水音が入ってきたに違いありません。また、ムラのすぐ近くを流れる川辺川には、所狭しと泳ぎ回る魚たちの影。おそらく、縄文人たちの目にもそうした光景が入ってきたに違いありません。さらに、ムラから見上げれば、湧き立つような深い森。おそらく、縄文人たちの目にもそうした光景が焼き付けられていたに違いありません。

こうした逆瀬川ムラを取り巻く谷や川、森は、縄文人たちのムラを包み込むとともに、四季折々に情景を変えながら豊かな山の幸を縄文人たちに与えてくれていました。

そんなことを逆瀬川ムラで見つかった、さまざまな種類の石器は教えてくれます。

22.礫石錘（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

23.礫石錘（頭地田口Ｂ遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

網漁と道具

石錘は、錘として網にくくり付けられます。その網は、川魚を捕る時に使われるものです。手ごろな、平たい河原石を拾ってきて、紐の掛かりを良くするためにその縁を打ち欠いて作ります。

逆瀬川遺跡では、473点が見つかっています。見つかった石器の5割強を占める多さです。また、頭地田口Ｂ遺跡で見つかった石錘には、それをくくり付けていた紐の跡がくっきりと残っていました。

24.磨製石斧（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

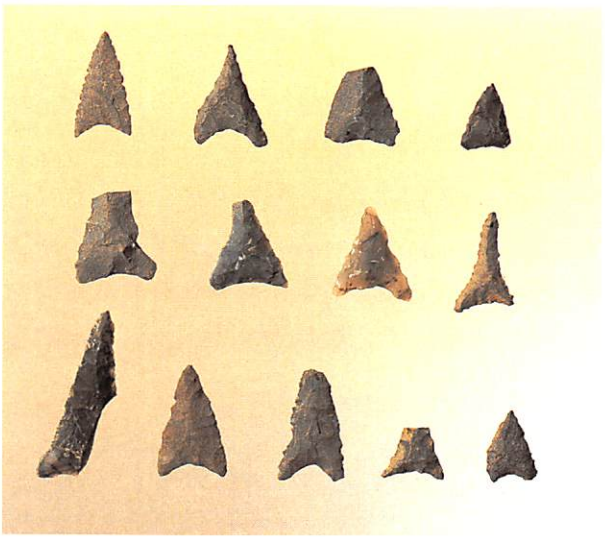
25.磨製石斧(鑿形)（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

木工と道具

磨製石斧は、木の伐採や粗割りの時、木の加工の時に使われます。

材料には、硬くて丈夫な石が選ばれました。

逆瀬川遺跡で見つかった磨製石斧には、大きさ、使い方で、２つの種類があります。１つ目の種類は、木の伐採に使われる石斧です。長さに対して幅が広い石斧です。２つ目の種類は、木の加工に使われる石斧です。長さに対して幅が狭い石斧です。今日の鑿と同じような石器です。



26.石鏃（逆瀬川遺跡）

27.石匙（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

狩りと道具

石鏃は、狩猟に使う矢の先端に取り付けられました。材料には、とても上手に小細工ができ、シャープな切れ味になる黒曜石やチャート、安山岩が使われました。加工は、とても緻密で、丁寧な仕事です。また、石匙は、し止めた獣の皮を剥いだりする時に使われました。ついた摘みがよく目立ちます。

逆瀬川遺跡で見つかった石鏃は、269点でした。石錘に次ぐ数の多さです。

ドングリ類と道具

磨石と石皿とは、ドングリ類を粉にする時にセットで使われました。石皿の上にドングリ類を置いて、磨石で磨り潰しました。磨り潰したドングリ類は、アクを抜いた後に加工したり、そのまま直接加工したりして、縄文人のお腹を満たしました。

28.磨石、石皿（逆瀬川遺跡）
写真提供：五木村教育委員会

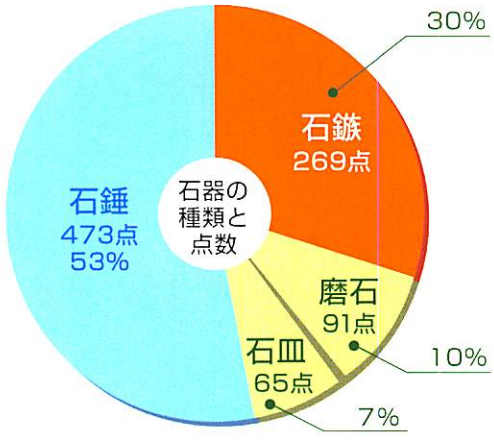
逆瀬川ムラでの暮らし

逆瀬川ムラでの暮らしを窺わせてくれる石器として、石鏃（狩りの道具）、磨石、石皿（植物食加工の道具）、石錘（魚捕りの道具）について見てみましょう。

見つかった石器の数は、石鏃が269点、磨石が91点、石皿が65点、石錘が473点でした。特に、石鏃と石錘の多さが目立っていますが、中でも石錘が際立っています。この石錘の多さは、眼下の川辺川での魚捕りがとても盛んであったことを窺わせます。また、石鏃からは、狩りも重要な仕事であった、逆瀬川ムラの人々の様子が想像されます。おそらく、野原ムラの人々は、川辺川で捕った魚を食べたり、山で狩った獣を食べたりしていたのでしょう。

そんな暮らしぶりの中で、磨石が少ないのは、森からムラに持ち込んだドングリ類を粉にして、食べやすくする作業が魚捕りや獣狩りに比べて低調であったことを示す、とてもおもしろい傾向です。

このように、野原ムラでの暮らしが山や川の恵みを充分に取り入れたものであったこと、特に川魚や獣の肉に重きを置いていたことを窺わせてくれるのです



野原ムラに活きた縄文人

ここで紹介します野原ムラは、球磨郡相良村の野原遺跡で見つかりました。今からおよそ4000年前の、縄文時代中期の終わり頃から後期の初め頃にかけての縄文ムラでした。調査は、そこに川辺川ダムが作られることから計画され、1999年4月から2000年3月までの1年間をかけて行われました。担当は、相良村教育委員会でした。

調査では、竪穴式住居跡という当時の家の跡2基が見つかりました。直径4mの円い形をした家の跡と四角の形をした家の跡でした。また、土器や石器という当時の道具もたくさん見つかりました。

この野原ムラで目をひくのは、ムラが置かれた土地です。なんと、野原ムラは、川辺川沿いのV字谷の山中で見つかったのです。ここは、斜面地にあることから分かるように、決して暮らし易い土地ではありません。こんな土地に縄文人たちがムラを置いたということは、山間でたくましく活きた縄文人たちの姿を想像させてくれ、とても興味深いものがあります。

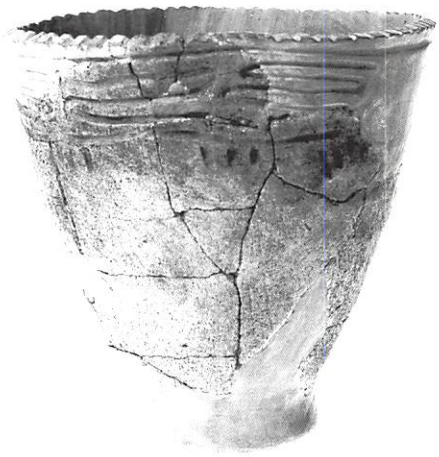
野原ムラの舞台

野原ムラは、縄文時代中期の終わり頃から後期の初め頃にかけての縄文ムラです。見つかった土器では、中期の阿高式土器、後期の南福寺式土器、市来式土器、出水式土器、鐘崎式土器、北久根山式土器などがあります。それらの年代は、今からおよそ4000年前と推定されています。

見つかった土器の多くには、まだ乾いていない土器の表面に棒の先を押し付け、すぐに引き上げたり（刺突文や連点文）、そのまま引いたり（沈線文）して付けた文様があります。文様の付け方も、長く引いたり、短く終わったり、丸みを持たせたり、それらを組み合せたりなどとさまざまです。また、縄文の一部を磨り消した磨消縄文もあります。

土器全体の形には、深鉢と浅鉢の2つの種類があります。縁の形には平縁のものと、突起がつくもの、波状のものとがあります。

29.阿高式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

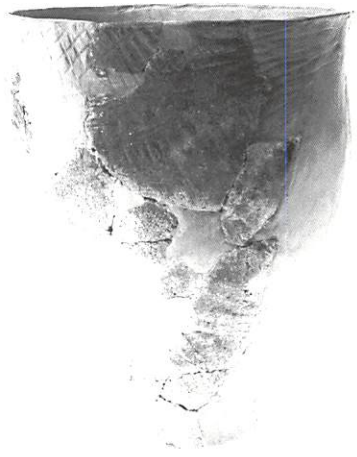


30.阿高式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

31.南福寺式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

32.出水式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

33.出水式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会



34.出水式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

35.南福寺式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

36.出水式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

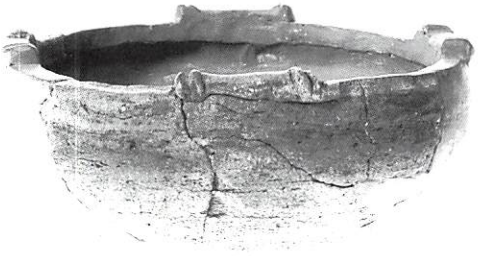
37.出水式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

38.出水式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

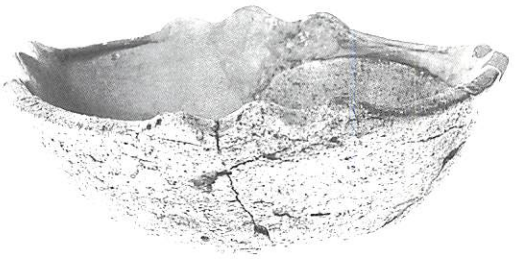
39.阿高系土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

40.無文深鉢形土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

41.南福寺式土器(浅鉢)（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会



42.南福寺式土器(浅鉢)（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会



43.南福寺式土器(浅鉢)（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

44.市来式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

45.市来式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

46.市来式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

47.市来式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

48.鐘崎式土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

49.注口土器（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

川に活きる、森に活きる

野原(のはら)ムラでは、……。

- 石錘(せきすい)は、魚取りの網の錘です。縄文人たちが盛んに漁労をしていたことが分かります。
- 磨製石斧(ませいせきふ)は、木を切り倒したり、切り倒した木を加工したりする道具です。縄文人たちが盛んに木工をしていたことが分かります。
- 石鏃(せきぞく)は、イノシシやシカなどの獣狩りをする時の矢の先に取り付けます。縄文人たちが盛んに狩猟をしていたことが分かります。
- 磨石(すりいし)や石皿(いしざら)は、ドングリ類を粉にする時に使う道具です。縄文人たちが盛んに植物性の食料を集めていたことが分かります。

ところで、野原ムラは、川辺川沿いの、V字谷の山中にあります。そこは、谷川を眺めることができる所。おそらく、縄文人たちの目にもそうした流れが映し出されたに違いありません。また、ムラの下を流れる川辺川には、所狭しと泳ぎ回る魚たちの影。おそらく、縄文人たちの目にもそうした光景が入ってきたに違いありません。さらに、ムラの周りには湧き立つような深い森。おそらく、縄文人たちの目にもそうした光景が焼き付けられていたに違いありません。

こうした野原ムラを取り巻く谷や川、森は、縄文人たちのムラを包み込むとともに、四季折々に情景を変えながら豊かな山の幸を縄文人たちに与えてくれていました。

そんなことを野原ムラで見つかった、さまざまな種類の石器は教えてくれます。

50　51　52

53　54　55

礫石錘（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

56　57　58

磨製石斧（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

網漁と道具

野原遺跡では、121点の石錘が見つかっています。

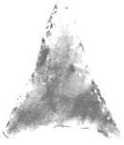
木工と道具

野原遺跡では、42点の磨製石斧が見つかっています。木の伐採に使われる石斧と木の加工に使われる石斧がありました。

59

60

61


62

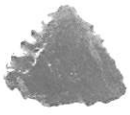
63

64

65

66

67


68

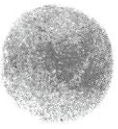
石鏃（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

69

70

71

石皿（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会


72

73

74

75

76

磨石（野原遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

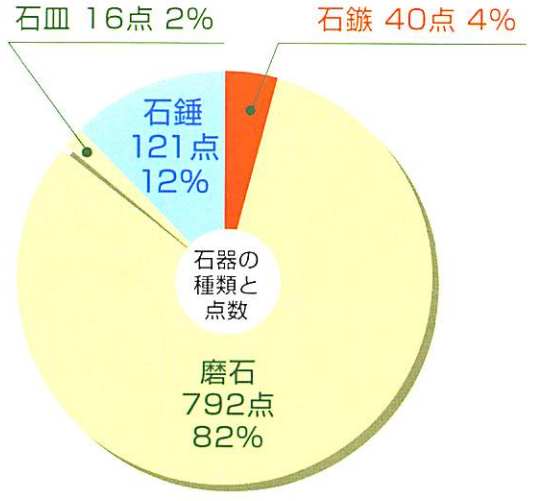
野原ムラでの暮らし

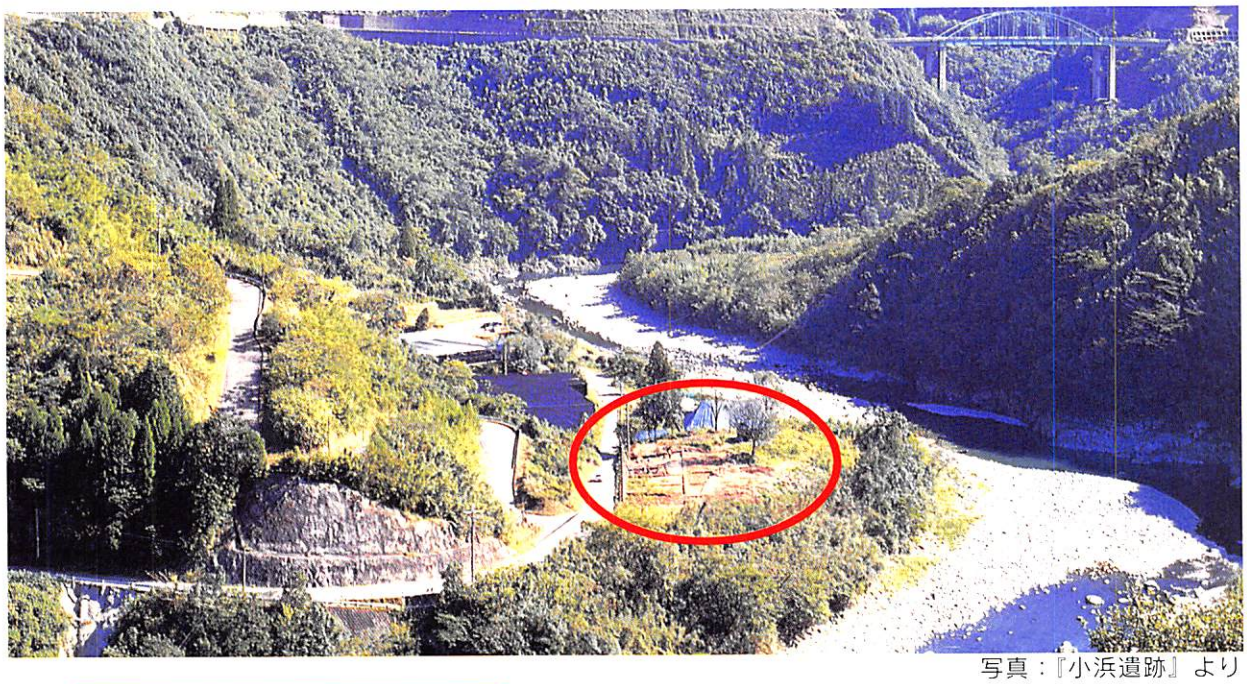
野原（のはら）ムラでの暮らしを窺わせてくれる石器として、石鏃（せきぞく）（狩りの道具）、磨石（すりいし）、石皿（植物食加工の道具）、石錘（魚捕りの道具）について見てみましょう。

見つかった石器の数は、石鏃が約40点、磨石が約792点、石皿が約16点、石錘が約121点でした。特に、磨石と石錘の多さが目立っていますが、中でも磨石が際立っています。この磨石の多さは、森からムラに持ち込んだドングリ類を粉にして、食べやすくする作業がとても盛んであったことが窺えます。また、石錘からは、眼下の川辺川で魚捕りをしていた野原ムラの人々の様子が想像されます。おそらく、野原ムラの人々は、ドングリ類を始めとした食用の植物を盛んに採集して食べたり、川辺川で捕った魚を食べたりしていたのでしょう。

そんな暮らしぶりの中で、石鏃が極端に少ないのは、狩りが他の仕事よりも低調であったことを示す、とてもおもしろい傾向です。

このように、野原ムラでの暮らしが山や川の恵みを充分に取り入れたものであったこと、特に食用の植物や川魚に重きを置いていたことを窺わせてくれるのです。





写真：『小浜遺跡』より

小浜ムラに活きた縄文人

小浜ムラは、球磨郡五木村の小浜遺跡で見つかりました。縄文時代の中期と後期の土器が見つかっていますので、この時期のムラの跡に違いありません。

そのムラの跡は、逆瀬川ムラと同じ、川辺川沿いのV字谷の谷底にありました。

77.阿高式土器（小浜遺跡）

谷間のムラムラ●

川辺川沿いのV字谷には、逆瀬川ムラや野原ムラの他にも、縄文時代中期から後期にかけての縄文ムラの跡が遺されています。例えば、すでに紹介した小浜遺跡の他にも、頭地田口B遺跡や頭地下手遺跡で縄文ムラの跡が見つかっています。

頭地田口B遺跡は、川辺川に五木川が合流する、川辺川沿いの中でもやや開けた土地にある遺跡です。2つの川の合流点を見下ろす、山の斜面地にありました。

頭地下手遺跡は、川辺川と五木川の合流点が間近に迫る、谷底近くの遺跡です。川が合流する場所は、単にそれだけのことではなく、人が行き交うミチが合流する所ということで、とても重要です。

さて、これらの谷間のムラムラは、私たちに何を伝えようとしているのでしょうか。

78.阿高式土器（小浜遺跡）

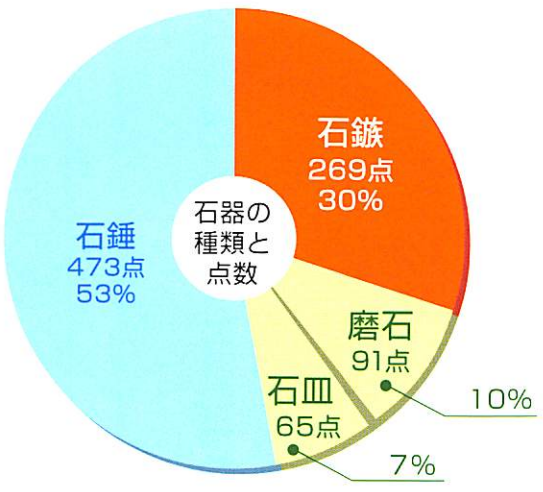
人々はたくましく活きる

川辺川沿いのV字谷には、今から4000年前の、縄文時代中期から後期にかけての縄文ムラの跡が遺されています。それらのムラには、谷底のムラと山中のムラがあります。

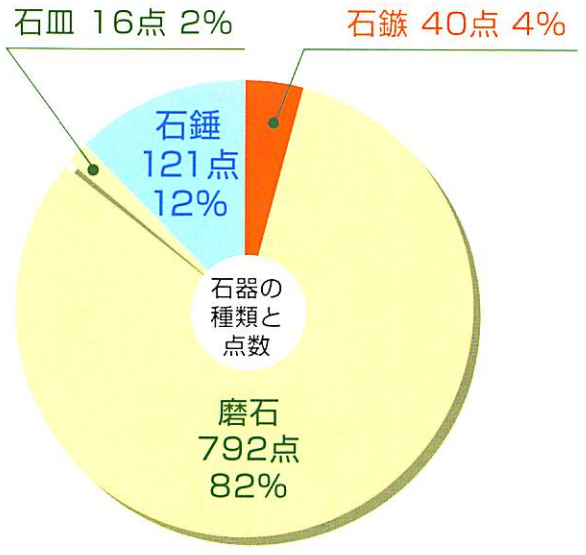
谷底のムラとしては、今回、逆瀬川ムラを取り上げましたが、この他に小浜遺跡や頭地下手遺跡で見つかった縄文ムラもあります。逆瀬川ムラでは石錘や磨製石斧が目立っていますので、谷底のムラは、川魚漁を主に生業としたムラであったと考えられます。

一方、山中のムラとしては、今回、野原ムラを取り上げましたが、この他に頭地田口B遺跡で見つかった縄文ムラもあります。野原ムラでは石鏃や磨石、石皿が目立っていますので、山中のムラは、狩猟や植物採集を主に生業としたムラであったと考えられます。

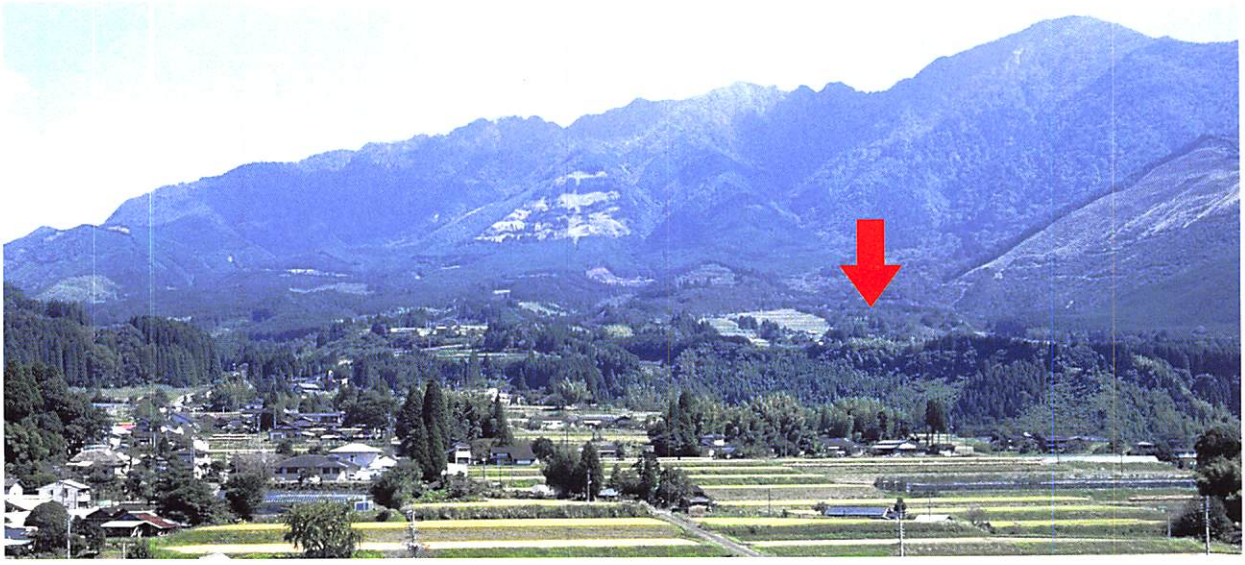
ただし、生業の違うムラが同時にあったとか、違う生業を営んでいた縄文人たちが同時にいたとかいうことは考えられません。おそらく、縄文人たちは、四季折々、その季節にあった生業を営む中で、ムラの場所を移していったに違いありません。川辺川を間近にした谷底のムラや、山の斜面に張り付くような山中のムラは、同じ縄文人が残したムラであり、その厳しい地形環境をものともせずに、縄文人たちがたくましく暮らしていたことを私たちに語りかけてくれているようです。



逆瀬川ムラでの人々の生業

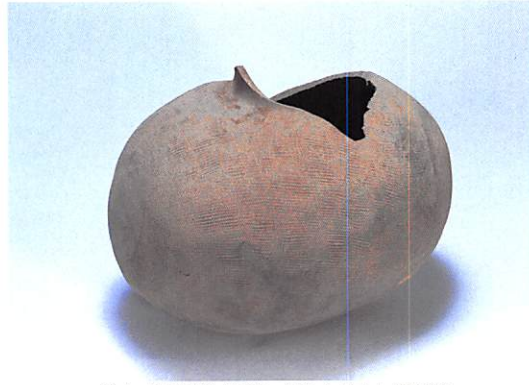


野原ムラでの人々の生業



79.須恵器提瓶

80.須恵器提瓶



81.須恵器横瓶（千人塚古墳群）

82.金環・銀環
（千人塚古墳群）

83.鉄刀（千人塚古墳群）

余話　山中の豪族たち

人吉盆地の東側にそびえる市房山（1722m）の中腹、やや緩やかに傾斜する丘陵に古墳群があります。これが球磨郡水上村湯山の千人塚古墳群です。この古墳群は、もともと70基を超える円墳が集まっていたらしいのですが、戦後すぐの開拓によってほとんどの古墳が壊され、10基前後の円墳が集まる程度になってしまいました。

すべて直径5～6m、高さ2m弱の小型の円墳で、石を積んで古墳が造られる積石塚と呼ばれる形式の古墳です。戦後の開拓の際に、須恵器や直刀、馬具、金環などがたくさんみつかりましたが、現在はその一部が残っているにすぎません。

市房山の中腹に、これだけの数の古墳が造られたということは、どのようなことを意味しているのでしょうか。また、彼らの生業は、いったいどのようなものだったのでしょうか。山中の豪族たちの姿を想像せざるを得ません。

コーナー2「祭る」

魅惑的で、神秘的な球磨。そこでは、免田式土器、模様を刻んだ礫などを使った不思議な祭りが行われていました。このコーナでは、そんな球磨の祭りの1面を紹介します。祭りや祈りの様子をイメージしてください。

84.長頸壷（井沢遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

85.免田式土器（入口遺跡）
写真提供：相良村教育委員会

86.免田式土器（不明）

免田式土器いろいろ

球磨には、免田式と呼ばれる特殊な弥生式土器があります。免田という球磨の地名が付けられた土器です。

ソロバン玉のような形の、強く折れ曲がった胴に、やや開き気味にのびる円筒状の長頸がつく、とても特異な形をしています。また、胴の上半部には、細い棒で引いた文様が付けられています。その文様は、文様上半と屈曲部が平行文、その間を埋めるのが重弧文や半重弧文、鋸歯文、綾杉文などと、いろいろです。当時の土器の中でもとても装飾性豊かな土器です。

87.免田式土器（市房隠遺跡）

88.免田式土器（市房隠遺跡）

89.免田式土器（金山遺跡）

90.免田式土器（高ノ原遺跡）

91.免田式土器（新深田遺跡）

92.免田式土器（新深田遺跡）

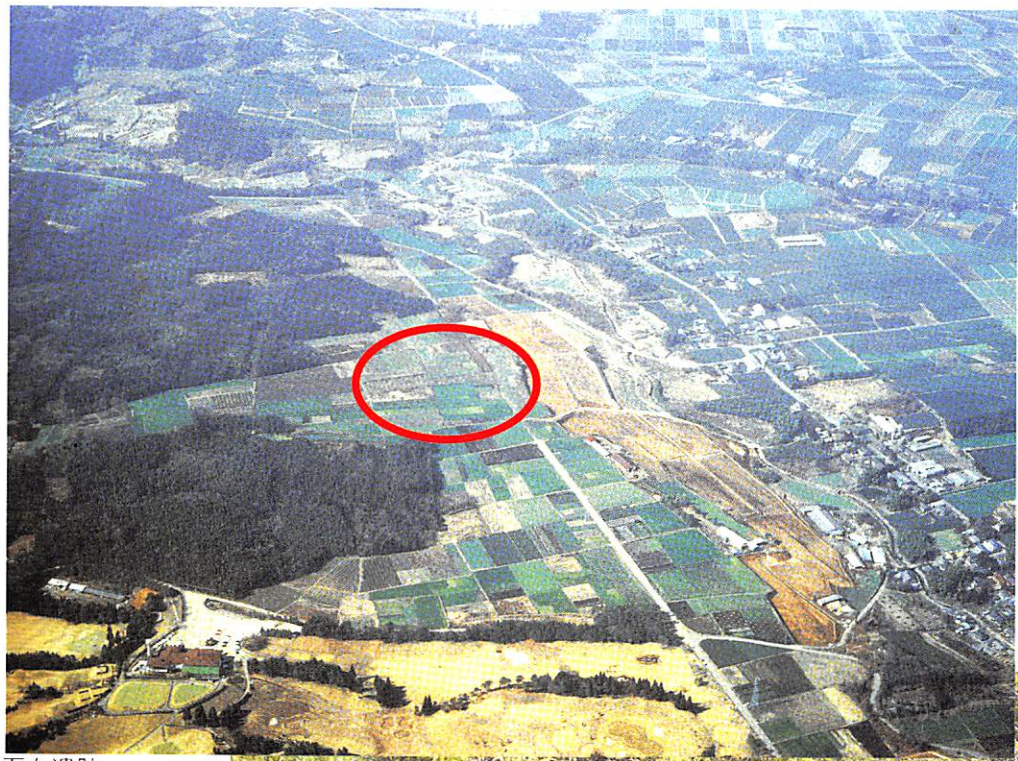
93.免田式土器（才柿遺跡）

免田式土器 ～ムラで祭る、ハカで祭る～

免田式土器は、1800年前の弥生時代後期に盛んに使われていた土器です。装飾性豊かな、スマートな形をした土器で、同心（どうしん）の半円弧の文様が下向きについていることから重弧文（じゅうこもん）土器とも呼ばれています。こうした装飾性の他、焼き上がりも硬く丈夫で、また表面も丁寧に磨かれるなど、他の日常の土器とは明らかに雰囲気が違っています。こうした雰囲気の違いから、免田式土器は、日常で使われる容器というよりも、祭りなど、非日常的な場面で使われる容器ではないかと考えられています。

球磨では、そうした免田式土器がたくさん見つかるなど、それを使った祭りが盛んに行われていました。その祭りには、ムラから見つかるものとハカから見つかるものがあるように、ムラの中で執り行われる祭りとハカで執り行われる祭りの、大きく2種類があったようです。今回、球磨郡錦（にしき）町の夏女（なつめ）遺跡とあさぎり町の本目（もとめ）遺跡を取り上げることによって、そのことを紹介したいと思います。

なお、九州の中央部（熊本県）では免田式土器がとてもたくさん見つかっていますが、その中でも緑（みどり）川沿いと球磨は、特にたくさん集まっています。この2つの地域がとても深く繋がっていたのは、間違いないでしょう。それがどのような繋がりだったのかは、祭りのことをもっと詳しく調べる必要がありますが、とても興味深いものがあります。



夏女遺跡

57号住居跡

写真提供：熊本県教育委員会

夏女ムラの舞台

夏女遺跡は、1800年前から1700年前の、弥生時代後期の後半から古墳時代の初めにかけてのムラの跡です。道路幅の調査区から竪穴式住居跡という当時の家の跡68基が見つかりましたが、遺跡全体ではもっと多くの家の跡があったものと推定できます。

見つかった当時の道具には、免田式土器の他、壷、甕、鉢、高杯、ミニチュア土器などの土器、鏃やヤリガンナなどの鉄器、鏡や釧（ブレスレット）などの青銅器、石包丁や磨石、石皿などの石器がありました。球磨の弥生時代のムラでは珍しい青銅器が見つかったことは、夏女ムラを考えるうえで、とても参考になります。

94.壷（夏女遺跡）

95.高杯（夏女遺跡）

96.台付甕（夏女遺跡）

97.台付甕（夏女遺跡）

98.台付甕（夏女遺跡）

68号住居跡

99.免田式土器（夏女遺跡）

100.免田式土器（夏女遺跡）

101.免田式土器（夏女遺跡）

57号住居跡

102.壷（夏女遺跡）

103.高杯（夏女遺跡）

104.鉢（夏女遺跡）

105.台付甕（夏女遺跡）

106.ミニチュア土器（夏女遺跡）

57号住居跡

107.石包丁（夏女遺跡）

夏女ムラの免田式土器

夏女遺跡では、免田式土器が家の跡から見つかりました。特に、57号と呼ばれる住居跡からたくさん見つかりました。この57号住居跡は、直径7.5mの円い形をした、張り出しのある、花びらのような形の家の跡です。

家の跡の中には、壷、甕、鉢、高杯、ミニチュア土器などが投げ込まれていました。そんな土器の集まりの中で、免田式土器は見つかりました。完全に近い形にまで復元できる免田式土器の他、復元できない破片もたくさん見つかりました。胴が強く折れ曲がっていて、平行文や重弧文も強い線で描かれていました。この57号住居跡の他に、68号と呼ばれる家の跡からも免田式土器が見つかりました。投げ込まれた土器の中から免田式土器が見つかりましたが、胴の折れ曲がりがシャープで、文様もとてもシャープでした。

ところで、夏女遺跡の中で、免田式土器が見つかった家の跡は、その土器の形からもっとも古いことが分かっています。これに対して、古墳時代の家の跡からは、免田式土器は見つかっていません。しかも、見つかった免田式土器は、形といい文様といい、古い土器の仲間に入ります。

夏女ムラは、弥生時代のムラの跡ですが、当時としては珍しい青銅器が見つかるなど、弥生時代社会の中で代表的なムラの1つでした。そんな夏女ムラの中で、弥生人たちは、免田式土器を使った祭りを執り行っていました。それは、弥生時代後期の後半から古墳時代の初めにかけて営まれた夏女ムラの中でも、最初の頃のことでした。

このように、夏女ムラは、当初ムラの中での祭りに免田式土器が使われていたものが、その後、新しい時期になると使われなくなったらしいことを教えてくれています。

本目遺跡　写真提供：あさぎり町教育委員会

墓地が築かれた時代

本目遺跡は、1700年前～1600年前の、弥生時代後期の終わりから古墳時代の初めにかけての墓地です。

ハカには、素掘りの穴に遺体を安置した土壙墓、木棺に遺体を安置した木棺墓、盛り土してそこにハカを造った墳丘墓、板石を円形に立て並べ、その板石の上から板石を平積みに積み上げて造った地下式板石積石室墓がありました。それぞれのハカが造られた時代は、土壙墓や木棺墓が弥生時代後期の終わり、墳丘墓、土壙墓、木棺墓が弥生時代の末から古墳時代の初め、地下式板石積石室墓が古墳時代の初めでした。

なお、免田式土器は、墳丘墓、土壙墓、木棺墓周辺で見つかりました。

本目遺跡で見つかったたくさんのハカ
写真提供：あさぎり町教育委員会

108.免田式土器（本目遺跡）

109.免田式土器（本目遺跡）

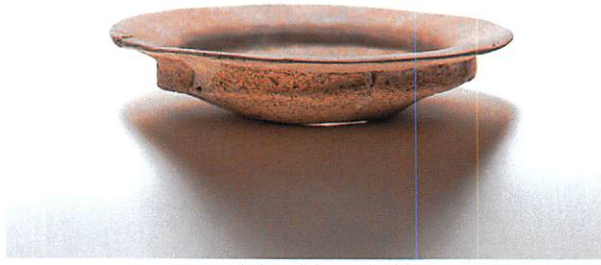
110.免田式土器（本目遺跡）

111.免田式土器（本目遺跡）

112.免田式土器（本目遺跡）

113.免田式土器（本目遺跡）

114.長頸壷（本目遺跡）



115.高杯（本目遺跡）

116.高杯（本目遺跡）

117.小型丸底土器（本目遺跡）

本目遺跡

ハカと免田式土器と供え物

弥生時代後期の終わりから古墳時代の初めにかけて、本目の墓地では、土壙墓や木棺墓、墳丘墓が造られていました。

免田式土器は、これらのハカの中やその周りから見つかりました。一緒に見つかった土器には、壷、小型の壷、高杯、鉢がありました。この中で、高杯が多いことと、甕が無いことに注目したいと思います。なぜならば、煮炊き用の甕が無いのはそこがムラ跡でないことを示しているからですし、高杯が多いのはそこが墓地などの特殊な場所であることを示しているからです。また、砕かれた鏡の破片の他、管玉とガラス製小玉がハカの中から見つかったことも見逃せません。

免田式土器では、強く折れ曲がった胴、強い線での平行文や重弧文の土器が少なく、弱い折れの胴、浅く弱い線での文様の土器が多く見つかっています。このことから、本目遺跡の土器が免田式土器の中でも新しい時期のものにあたることが分かります。

本目遺跡は、弥生時代後期の終わりから古墳時代の初めにかけて営まれた墓地でした。それも、鏡の破片や管玉、ガラス製小玉がハカの中から見つかったり、墳丘墓が造られたりと、球磨の中でも中心的な役割を果たした弥生人たちの墓地でした。この墓地の中で、弥生人たちは、免田式土器を使った祭りを執り行っていました。その様子は、何かを入れた壷や小型の壷を据え置き、高杯や鉢に供え物を乗せて、死者を弔うというものだったらしく、ハカの周辺から見つかった大量の土器がそのことを物語っています。そしてその時期は、免田式土器の中でも終わり頃にあたっています。

祭りいろいろ

球磨では、免田式土器を使った祭りが盛んに行われていましたが、この他にもさまざまな祭りや祈りがあったことが分かっています。

例えば、縄文時代や弥生時代の遺跡からは、石の表面に図柄や絵柄を刻んだ線刻礫と呼ばれるものが見つかることがあります。また、特殊な形の土器が縄文時代や弥生時代の遺跡から見つかることもあります。さらに、何らかの意味を持って身体を飾ったものが縄文時代以降の遺跡から見つかることもあります。

一方、墓地という特別な場所が残され、そこで祭りや祈りが行われることもありました。縄文時代後期や晩期の埋甕や弥生時代以降の墓地では、そうしたことが行われていたはずです。例えば、一字一石経は弔いの風習でしょうし、お供え物が墓の中に納められることにはそれなりの意味があったものと理解できます。

祭りや祈りを考えることは、当時の人々の心性や精神生活に深く入り込める機会につながるという点で、とても大切なことです。免田式土器の他に、どのような祭りや祈りがあったのかを少しのぞいてみることにします。

118.（大丸・藤ノ迫遺跡）

119.（別府遺跡）

118-119.線刻礫

120　121

122

123

124

120-124.一字一石経（頭地松本B遺跡）
写真提供：熊本県教育委員会

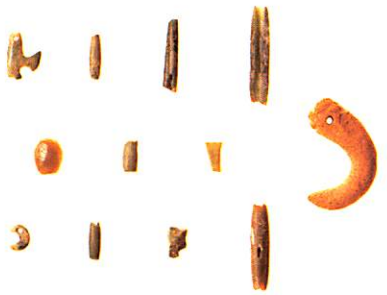
石に記された祭りの証し

人は、祭りや祈りのために、身近なものに図や絵、文字を記します。球磨では、そうした石に記された祭りの証しが見つかっています。

線刻礫は、平たい石の表面に図柄や絵柄を刻み込んだものです。球磨郡山江村の大丸・藤ノ迫遺跡では、表面と裏面に抽象的な図柄を刻み込んだ線刻礫が見つかっています。7000年前の縄文時代早期の終わり頃です。球磨郡あさぎり町の別府遺跡では、シカの絵柄が刻み込まれた線刻礫が見つかっています。2000年前の弥生時代です。

一字一石経もまた石に記された祈りの証しです。球磨郡五木村の頭地松本B遺跡の経塚から見つかった一字一石経を紹介しました。18世紀に追善供養として築かれたと考えられています。

中堂遺跡
写真提供：人吉市教育委員会



125.勾玉、管玉、異形勾玉等（中堂遺跡）

126.小型浅鉢形土器（中堂遺跡）

128.小型深鉢形土器（中堂遺跡）

127.小型深鉢形土器（中堂遺跡）

129.小型浅鉢形土器（中堂遺跡）

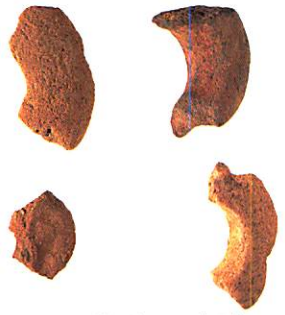
縄文の祈り

人吉市の中堂遺跡は、球磨川沿いの自然堤防の上に営まれた縄文時代後期の終わり頃から晩期にかけてのムラの跡です。この中堂遺跡では、当時の家の跡である竪穴式住居跡が81基、幼くして死んでしまった子どもたちを葬った埋甕38基などが見つかりました。

このムラの跡で見つかったのが、玉類や土製勾玉、特殊な形の土器です。玉類には、蛇紋岩製の勾玉1、異形勾玉1、管玉4、滑石製の管玉2、丸玉1などがあります。また、土製勾玉2とリング状土製品1があります。さらに特殊な形の土器として、小型の浅鉢形や深鉢形の土器があります。

幼くして死んでしまった子どもたちの霊を慰めるためのものなのか、これらは、縄文の祈りを窺わせてくれるものとして、とても大切なものです。

130.壷形土器（灰塚遺跡）



131.耳栓（灰塚遺跡）

132.耳栓（白鳥平Ａ遺跡）

133.石製品（白鳥平Ａ遺跡）

祭りの原型

祭りは、いつ始まり、どのようなものだったのでしょうか。

球磨郡あさぎり町の灰塚遺跡で見つかった壷形土器と耳栓、人吉市の白鳥平Ａ遺跡で見つかった耳栓と石製品があります。壷形土器は、穴の中からまとまって見つかりましたが、何らかの目的で埋め込まれたものと考えられます。ムラの中で行われた祭りの道具に違いありません。また、耳栓や石製品も身体を飾ったりするもので、特別な意味があると考えられます。

これらは、今から8000年前～7000年前の縄文時代早期のもので、祭りの原型を示すものでしょう。

人々は何を求めるか

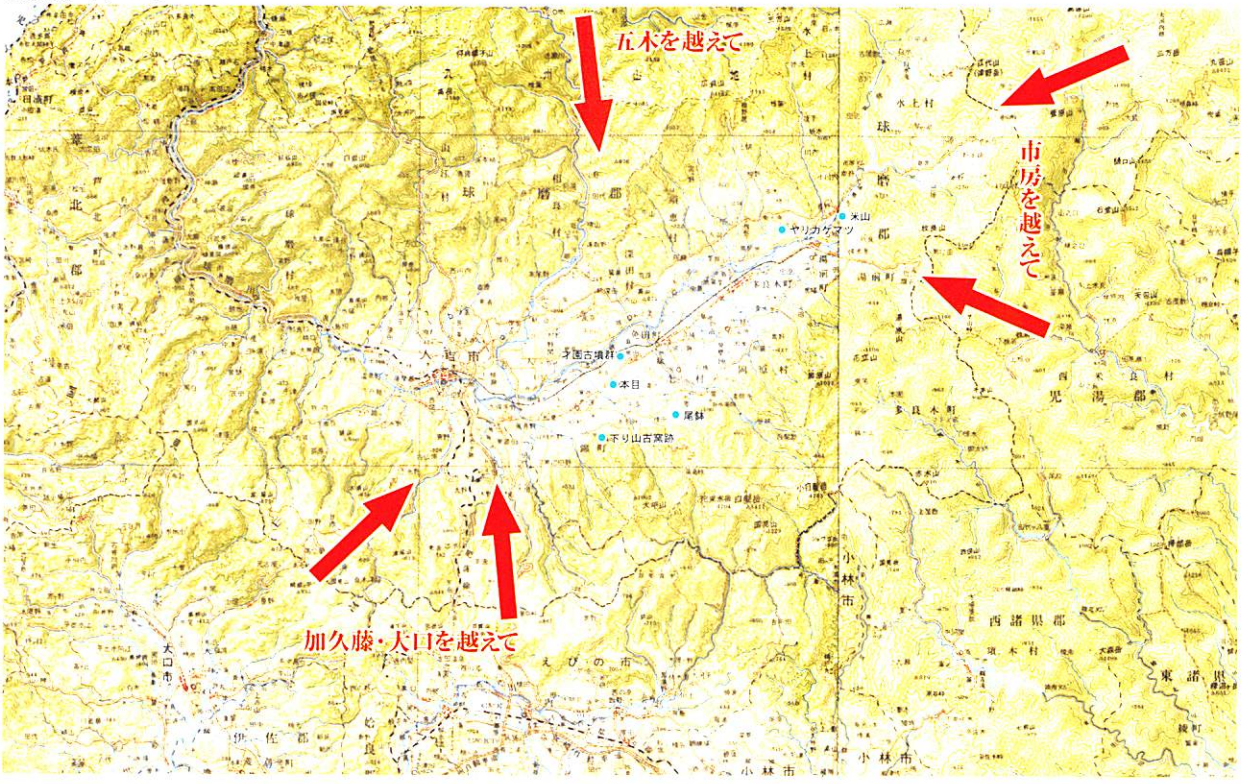
ムラの中での祭りや祈りは、ムラの中に壷形土器を埋めた縄文時代早期に遡ります。人々がムラを構え、そこで暮らし始めようとした時、人々の間に生じるストレスは相当厳しいものがあったはずです。人々は、そんなストレスを避けようとムラあげての祭りを始めました。そんな人と人との間に生じるストレスの他、ムラの中には、身近な人の死に係わるストレスもありました。特に、幼くして死んだ子どもたちの死は、ムラの中に深い悲しみをただよわせるものでした。人々は、こうした悲しみを祈りという形で紛らわしました。深鉢に遺体を納めて葬っての祈りは、こうした中で始まったものと考えられます。

そんな祭りや祈り。そこに人々が求めているものは、安らぎでした。

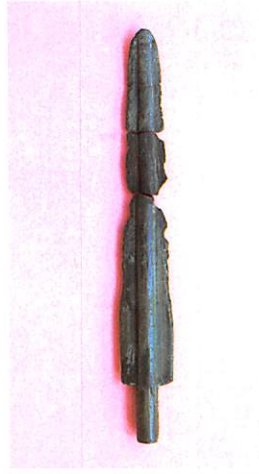
縄文時代早期に始まる祭り、そして縄文人たちの祈り、さらには免田式土器を使った祭り。これら、原始から始まる祭りや祈りは、形を変えながらもその時代その時代の人々によって今日まで受け継がれ、人々に安らぎを与えながら球磨の文化を育ててきました。そんな歴史が、祈りの里、球磨のイメージの基層に流れるものです。

九州山地の山懐に抱かれて、閉ざされた球磨（くま）。しかし球磨の人々は他の地方の人々と盛んに集っていました。その結果、先土器（せんどき）時代から今日まで様々な文物が球磨に遺されました。多種多様な文化を蓄積する、球磨の文化の奥深さは、こうした背景の中にあります。

「集う」イメージ



134.阿高式土器（米山遺跡）



135.細型銅剣（ヤリカケマツ遺跡）
写真提供：熊本市立博物館

136.刻銘入り須恵器（下り山古窯跡）

五木を越えて

五木を越えて球磨へ至る道は、北からの道です。宇土や八代の平野からの山越えで、縄文時代以来たくさんのものがそのルートを使ってもたらされました。川辺川沿いに点々と遺されている遺跡は、それに関係するものと考えられます。主なものを紹介します。

阿高式土器は、今から5000年前の中九州で流行した土器ですが、有明海・不知火海沿岸周辺からもたらされたものと考えられます。銅剣や銅鏡などの青銅器もこのルートでもたらされたものでしょうし、免田式土器もまた緑川沿いの地域と球磨との深い繋がりを教えてくれます。さらに宇土との係わりを直接示す文字（「□人　大件■■　□井郷夫人　□□国宇土郡」）が刻まれた須恵器が錦町の下り山窯跡で見つかっています。

137.鉢（本目遺跡）

138.器台（本目遺跡）

市房を越えて

市房を越えて球磨へ至る道は、東からの道です。宮崎の西都や延岡の平野からの山越えで、縄文時代以来たくさんのものがもたらされました。主なものを紹介します。

船元式土器は、今から5000年前の瀬戸内地方で流行した土器です。これが、球磨郡あさぎり町の尾鉢遺跡など、球磨でも見つかっています。また、吉備地方で作られた弥生時代後期の長頸壷や、大分から宮崎、さらには瀬戸内地方まで広がる弥生時代後期の器台や高杯も本目遺跡で見つかっています。

139.高杯（本目遺跡）

140.高杯（本目遺跡）

141.吉備系長頸壺（本目遺跡）

142.長頸壺（本目遺跡）

143.船元式土器（尾鉢遺跡）

加久藤・大口を越えて

加久藤や大口を越えて球磨へ至る道は、南からの道です。宮崎のえびのや鹿児島の大口からの山越えで、縄文時代以来たくさんのものがもたらされました。主なものを紹介します。

縄文時代では、10000年前の前平式土器、4000年前の市来式土器など、南九州で流行した土器が見つかっています。また、古墳時代の鹿児島北部で流行した地下式板石積石室墓や、宮崎方面で流行した地下式横穴墓が球磨で見つかっています。さらに、古墳時代の土器である成川式土器によく似た土器もたくさん見つかっています。

人々はどこを向く

球磨は、九州山地中にあり、四方を山に囲まれた盆地とその周辺の九州山地を舞台とするように、あまり外の人々と触れ合う機会が多くない、「あたかも閉じられたような空間」と受け取られがちです。しかし、それはあくまでも印象にすぎません。実際は、多くの人が行き交い、さまざまな文物が流れ込む、開かれた空間だったのです。そのことを、これまでに見つかったさまざまなものが物語っています。

例えば、「交流の機会が少なかったのでは」と思われがちな縄文時代や弥生時代にあっても、各地で流行した縄文式土器や弥生式土器や青銅器などが入り込んでいますし、ましてや古墳時代以降は、「何をか言わんや」でしょう。今、球磨の独特な文化を思うとき、それが交流の積み重ねによって醸し出されてきたものであることを改めて感じることができます。

五木越えという北からのルート、市房越えという東からのルート、加久藤・大口越えという南からのルート、そして八代方面や芦北方面からの西からのルートと、四方を向く球磨は、各地の文化を受け入れ、それを留め置くことによって、独自の文化を作ってきました。

球磨の文化は、その地形と四方を向く人々によって作られたに違いありません。

ゾーンⅢ「球磨に学ぶ～ある考古学者の軌跡～」

考古学者「高田素次」は、戦前から戦後と、球磨の古代史の解明に心血を注ぎました。彼の執念は、想像を絶するもので、多くの人々を驚嘆させました。

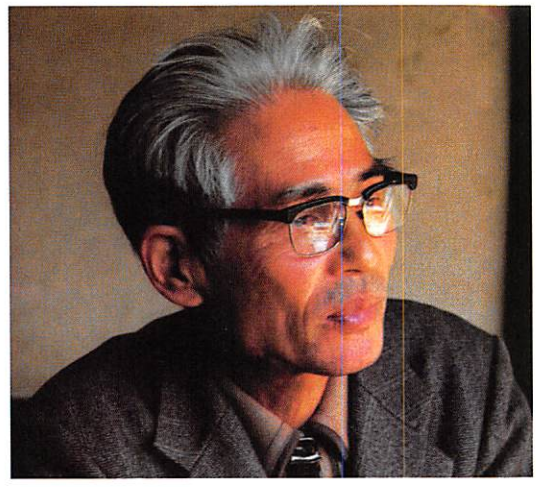
特に、戦前重弧文のある特異な形の土器に注目して、それを東京考古学会の第１回総会で発表したことは特筆に価します。１人上京して居並ぶ当代一流の考古学者たちの前での学界発表でした。また、石清水式土器を発見した時のエピソードは感動的です。しかも、小林久雄がその土器を取り上げて、当時の縄文式土器研究に一石を投じたことは学史の中に今でも生きています。

「球磨に学ぶ」では、こうした高田の「軌跡」をまず紹介します。発見にまつわるエピソードを織り交ぜながら、高田の著作物や実物資料により、そこまで高田を動かしたものは何だったのか、を共に考えたいと思います。また、浜田耕作と球磨の老婆との人間味溢れる関係や、乙益重隆等、所縁の考古学者を高田の足跡を通して紹介したいと思います。さらに、ある「旧石器」が発見され、それが今に残されている訳を、発見の経緯から紹介したいと思います。

144.高田素次著作物

145.黒川式土器
高田は、この土器をとてもかわいがっていました。

Mototugu Takata



146.免田式土器（市房隠遺跡）
高田は、「免田式」と呼んでほしいと訴えました。

『球磨上代文化資料集成』（十三年三月十日刊）に見る高田素次の原点の意志表示

序

私は考古学者ではない。考古学の研究家でもない。たゞ村役場の戸籍事務のかたはら土器や石器を漁り歩き、あちこちの遺蹟地をほっつき歩いて―といってもほとんど郡内に限ってゐるのであるが――つでも二つでも遺物を拾ふことに楽しんでゐる一介の変り者にすぎないのである。

私がかういふ事に興味を持ち出したのは、さう二十一か二の頃からであったと思うからもうおっつけ五六年はたってゐることになるのであるが、その実蹟たるやまことに微々たるもので今更かういふ冊子を出すなどいふことは実におこがましい限りであると思ふのだけれども、夏休みも冬休みも持たず、たゞ年から年中仕事に追われ通しの私にしてみればかうしてある時期に蒐集物のひと整理しておかないとどうにも手のつけられないものにしてしまふ恐れもあり、又紛失したりこわれたりするおそれもあるし、またかういふ仕事をすると勢ひ自分の勉強にもなり自分の蒐集物に対する愛も増し面白味も湧いて来ようと、何年かの計畫で始めてみたのである。

先ず第一輯を遺物の集成としたのであるが、これは又資料の目録であり、出土地名表にすぎないものであるが、これでも私にしてみれば相當の仕事であると思ふ。

私がかういふ仕事をすることに対して或ひは笑ってゐるひともあるだろう。然しその中には必ず一人位は喜んでくれる人のあることを信じてゐる。私はこれによって郷土といふものが幾分かでも強く認識され愛され研究家の研究資料になるものがあるとすればそれでいいと思ってゐる。勉強はしたい。本格的な学問はしたい。基礎的な大態の骨だけでもいゝ。然し今の私はただ郷土から離れたくない心で一杯である。球磨上代の文化のすばらしさをおもう時これほどありがたい球磨の天地にどうして後がむけられよう。掘っても掘ってもつきないこの遺物の量とそして多種多様な型式的様式的な変化と匂ひとを知って誰が東京などへわざわざ出かけて行くものか。私はひとりでこちこちかういふものを蒐集する喜びに浸ってゐよう、酔ってゐよう。私はそれで幸福だ。妻も子も親も兄弟も亡くしてしまひ、内親の愛からほとほとはなれて育った私が今までにたいした屈曲もなく通して来得たのは一つにはこの土器と石器とのおかげであったことを思ふ時、つまらないとは思ひ乍らもかういふものを世に出すといふことは矢張り遺物に対する感謝の心からでもあり、遺蹟地に対する愛からでもあるのである。私は土器と石器によって育てられて来た。私が土器と石器のことを書くことはむしろ當然なことであり又私の責任でもある様な気がする。

昭和十三年三月十日　起草の日

高　田　素　次

ある考古学者の軌跡

高田素次（本名、元）。考古学者、民俗学者、歴史家、郷土研究家、歌人、俳人等々の多才な人でした。高田の学風・作風から溢れ出るのは、郷土愛であり、人間愛です。

高田は、1912（大正元）年10月5日、球磨郡上村（現、あさぎり町上）に生まれました。1931（昭和6）年旧制人吉中学卒業後、小学校の代用教員を経て、1933年に上村役場に入るも1950年依願退職。けっして豊かとはいえない暮らしの中で、球磨のさまざまな分野の研究に打ち込みました。生涯の中で残した、30冊以上の著書、数多くの学術論文、随筆、短歌、俳句などは今でも光輝いています。県文化財保護功労者、熊日賞、県近代文化功労者、荒木精之賞など受賞。

そんな高田の考古学の研究は、1935（昭和10）年8月、泗水町出身の坂本經堯の「人吉盆地周縁の史前遺跡を訪ねて」に同行したことがきっかけで始まりました。同じ年、石清水式土器を発見。1937年には本目遺跡を乙益重隆と一緒に調査し、その成果を『考古学』8－11に寄せました。1938年にはあさぎり町才園古墳と共に、それまでの調査成果をまとめた『球磨上代文化資料集成（目録）』を発行。1939年には東京考古学会に単身乗り込んで、免田式土器についての研究を発表しました。そして、1940年『日本貝塚の貝類』、1941年『吉野朝以前に於ける球磨の金石文資料』の発行へと続いていきました。

では、高田をこれほどまでの研究に駆り立てたものはいったい何だったのでしょうか。そのことを窺わせるものが、高田が書いた『球磨上代文化資料集成』の序文にあります。

私は考古学者ではない。考古学の研究家でもない。たゞ村役場の戸籍事務のかたはら土器や石器を漁り歩き、あちこちの遺蹟地をほっつき歩いて―といってもほとんど郡内に限ってゐるのであるが――つでも二つでも遺物を拾ふことに楽しんでゐる一介の変り者にすぎないのである。

（略）

私がかういふ仕事をすることに対して或ひは笑ってゐるひともあるだろう。然しその中には必ず一人位は喜んでくれる人のあることを信じてゐる。私はこれによって郷土といふものが幾分かでも強く認識され愛され研究家の研究資料になるものがあるとすればそれでいいと思ってゐる。勉強はしたい。本格的な学問はしたい。基礎的な大態の骨だけでもいゝ。然し今の私はただ郷土から離れたくない心で一杯である。球磨上代の文化のすばらしさをおもう時これほどありがたい球磨の天地にどうして後がむけられよう。掘っても掘ってもつきないこの遺物の量とそして多種多様な型式的様式的な変化と匂ひとを知って誰が東京などへわざわざ出かけて行くものか。私はひとりでこちこちかういふものを蒐集する喜びに浸ってゐよう、酔ってゐよう。私はそれで幸福だ。妻も子も親も兄弟も亡くしてしまひ、内親の愛からほとほとはなれて育った私が今までにたいした屈曲もなく通して来得たのは一つにはこの土器と石器とのおかげであったことを思ふ時、つまらないとは思ひ乍らもかういふものを世に出すといふことは矢張り遺物に対する感謝の心からでもあり、遺蹟地に対する愛からでもあるのである。私は土器と石器によって育てられて来た。私が土器と石器のことを書くことはむしろ當然なことであり又私の責任でもある様な気がする。

この文章の中から、なぜ高田が研究に突き進んだのかを読み取りましょう。それは、ほとばしる郷土愛や人間愛であり、当時東京で考古学を学んでいた乙益重隆への期待を込めた暖かな眼差しとライバル意識であったことが分かります。そこに高田の強烈な個性の源があったのです。

学問環境に恵まれることのなかった、ある考古学者の軌跡は、今の私たちに何を語りかけてくるのでしょうか。

遺跡は感動だ！

遺跡は感動です。

遺跡には、土器や石器を拾い上げた時や掘り出した時、それらのかけらをつなぎ合せた時などの感動がいっぱい詰っています。現に、私も、小学生の時、日が暮れるのも忘れて土器を拾い集めた時の感動、20年ぶりにその遺跡に出会い、その遺跡を夏女と名付けた時の感動を今でも鮮やかに思い出します。それは、未知なものを探し出せたこと、未知なことに気付けたことへの喜びや驚きに外なりません。

高田素次（たかたもとつぐ）の周りには、そんな感動が満ち溢れていました。高田の文章の随所にそうした感動が散りばめられています。

土器片（自著『嘘のような本当の話』所載）

掘り取って来た土器のかけらを、洗って乾して接ぎ足してゆく作業は、考古学徒の誰もがやる一つの楽しい仕事である。

それは、昭和十年の暮頃のことだったかと思うが、人吉の石清水というところに丁度道路工事があっていた頃のことである。自転車でそこを通りかかって、その切り取られた道路の断面に、土器片の一群を見付けた私は、附近に落ちていた棒切れを拾って来ると、何時間か掛ってその一群を掘り取り、ハンドバックに入れて病院に着いた時は、約束の時刻をすでに三時間も過ぎていて、入院して待っていた妻をひどくおこらせ、また無性に喜ばせた思い出も今はかなしい。

妻が亡くなったあとで、この一群の土器片が、底部の少し上った、押型紋の深鉢型の、しかも完形を復元させ得るしろものであることが判った時、私は密かに妻の位牌にこのことを告げ、喜びを語ったものであったが、熊本博物館に、東光彦君の手で、この器型を模して作ったという土器が陳列されているのを見ては、さすがに胸のうずく私であった。

けだし、我々の集めている土器の資料の殆んどは、皆かけらばかりに過ぎない。かけらを接ぎ足し、石膏で補充して原型を復元しようとする努力は、一つの哲学でもある。我等もまたかなしい人間のかけらの一つに過ぎないからである。今年小学校を卒業する長男がまだ一年の頃だったと思う。ある日、タケノコかぎに行くといって家を出たものの、途中で畑の地下げをしているところに、多くの土器片を掘り出しているのに出合うと、ついに薮まで行くのをやめて、土器のかけらばかりを籠一杯ひろって、いつもにない頓狂な声を出しながら帰って来たことがあった。条痕文のある大型の土器片を、その夜早速長男にも手伝わせながら接ぎはじめると、段々大型の鉢型土器に出来上って行った時の、長男の歓声を私は今も忘れない。一片のかけらを計測してはその断面の曲線を知り、それによって全形を復元しようとする努力は、ついには一片のかけらによって全形を察知する眼力ともなるのである。いつか長男と上村の的射場遺蹟に行った井上猪一郎君が、そこで採取して帰った土器片の中に、かつて私がやはりそこで拾ったのと全く同じ手工の、まるいマドを幾つも口縁部に並べてあけた土器の一片があった。私は私の前に拾ったそれとすぐに比べて見た。するとどうだろう、その二つは全くぴったり接着してしまったではないか。余程前にこわれて、余程前から別々に土中に埋っていたに違いないこの二つのかけらは、別々に掘り上げられ、拾いとられながらも、ついに再会することが出来たのに、人の世には生きていながら一緒になれない親子があり、夫婦がある。人生は限りなく美しいと同時に限りなく寂しい所であることを土器片はきっと知っているにちがいない。あの時の井上君の顔は今も消えないが、その井上君ももうこの世にはいないのである。

（熊本日日新聞・三十年二月二十二日掲載）

浜田博士の詫び証文

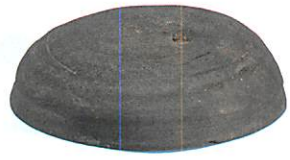
球磨には、京都帝国大学の総長を務めた浜田耕作にまつわるエピソードが残っています。それは、あやまって土器を壊してしまった浜田を持ち主のお婆さんが怒り、浜田に詫び証文を書かせたというエピソードです。

浜田耕作（1881－1938）は、京都帝国大学に考古学教室を開設した考古学者で、日本考古学の基礎を作った方です。浜田は、考古学教室の開設後、日本各地で遺跡調査を行いましたが、熊本県内でもその一環で装飾古墳や縄文貝塚を調査し、その成果を『京都帝国大学文化大学考古学研究報告』にまとめました。

浜田は、1917（大正6）年、人吉市大村横穴群の調査の時、犬童家を訪れて、蕨手刀と一緒に見つかった碗を調査しました。詫び証文の1件は、この時におこった出来事です。「同じ物を送る」といった浜田に、「同じ物が２つあるものか」と応じたお婆さん。何とも言えず、つい笑いがこぼれそうなやり取りです。

大正六年正月十一日寫真撮影ノ
際誤リ破損客舎之ヲ修補ス
於人吉　濱田耕作

147.浜田博士の詫び証文



148.浜田博士提供須恵器

149.蕨手刀（大村横穴群周辺）

150.蕨手刀箱

ことの発端

ことの発端は、浜田耕作が碗の写真を撮っていた時に、あやまって落としてしまったことです。高田素次（たかたもとつぐ）は、ユーモアに溢れる文章で書き綴っています。

浜田博士の詫び証文（自著『山麓抄』所載）

浜田耕作先生が梅原末治先生をお連れになり、人吉駅の裏手の、村山の横穴群を調査に来られた時の話だから、大正六年の一月のことであつたろうか。通称「赤瓦」で通つている犬童家に、明治四十年頃、鉄道工事の際に、附近から掘り出したのだといつて保存されている蕨手の太刀と、碗形の土器があるのを見たいと、赤瓦に立寄られた時のことである。

一応調査を済まされて、浜田先生はその写真を撮ろうと、台の上に土器をのせながら写真機をのぞきこまれた時であつた。どうしたはずみでだつたのか、台の上の土器がころりと転んで、床の上に落ちてしまつたのであつた。驚かれたのは浜田先生ばかりではなく、側で蕨手の太刀の実測図を作つて居られた梅原先生がびつくりされた。が、それよりも驚かれたのは赤瓦のおばあさんであつた。世界に二つとは無い物のように思いこんで、今まで大切にしておられた品だけに、真二つに割れてしまつた土器を見ると、おばあさんの顔は真青になつて行つた。恐れ入つて頭を下げられる浜田先生に向つて、おばあさんの声は噛みつくようにふるえていた。「おまんな、(お前さんは)そういう無調法なことばして、ゆうぞそいで大学の先生の勤まんもす。昔ないば、打首でぐざんそうばい」目は確かに角立ち、額には青筋が立つていた。先生はどうしようもないので、たゞ両手をついて平あやまりにあやまられるのであつたが、おばあさんの顔色は一段と真青であつた。先生は恐る恐る、小さな声で

「誠にどうも、何とも申訳のないことをしてしまいまして相済まない事でございますが、いずれ京都に帰りましたら、早速同じ物をお送り致しますから……」と言いかけられると、おばあさんは踏みつける様に、

「同じもんの二つ、どうい有りもそうに。おまんも（お前さんも）もう一人居れば、ニセもんでぐざんそうばい」

このけんまくには浜田先生も困られて、「弁償せよとおつしやれば、出来るだけのことは致します」と言つて頭を下げられるのを、おばあさんは見向きもせず、硯箱を引きよせると、土器の入つていた桐箱の蓋をさして、いつどうしてこの土器を割り、誠に申訳のないことを致しましたが、今後は決してこの様な無調法は致しませんと、こゝに自分で書きなされ、と命令されるのであつた。先生は言われるまゝに筆をとり、蓋の内側に、おばあさんの言われる通りに書いで署名されたので、やつと許されたのであつたが、後に先生はこのおばあさんに四国で発見された同じ型の同じような大きさの土器を送つてよこされ、おばあさんは死ぬまで先生の箱書と共にこれを大切に持つていた。

昭和十八年の暮に、梅原先生がお見えになつた時、私がこの話をすると、先生は、あの時は本当に恐ろしかつたですよ。としみしみ述懐されたのだつたが、こうした話もどこかに書き残しておいてよい話ではあるまいか。

（熊本日日新聞　三一年二月一日掲載）

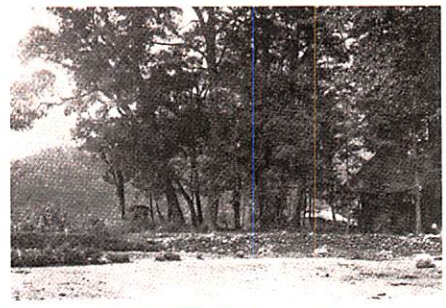
集う考古学者

高田素次のもとを、梅原末治、乙益重隆、小林久雄、坂本經堯、三島格など、日本的な多くの考古学者が訪れました。彼らは、高田と共に、未知なものを探し出せたこと、未知なことに気付けたことへの喜びや驚きを共有できる人々であり、遺跡を感動できる人々でした。そして、高田は、集う多くの考古学者との交流を通して、大きく成長していきました。

訪れた考古学者は、高田が長年収集した資料を調査しました。そうした中で、世に出された業績は、枚挙に暇がありませんが、その中で特に上げるとするならば、石清水遺跡や頭地下手遺跡、本目遺跡、才園古墳などの発見でしょう。石清水遺跡や本目遺跡の発見は石清水式土器や免田式土器を全国的に有名にしましたし、頭地下手遺跡や才園古墳の発見は学界を驚愕させました。

そんな考古学者の中で、熊本県の考古学の基礎を作った考古学者、小林久雄と坂本經堯を取り上げてみましょう。

151.頭地下手遺跡土器



頭地下手遺跡
写真：『九州縄文土器の研究』より

小林久雄と頭地下手遺跡

小林久雄（1885－1961）は、下益城郡隈庄町（現、城南町）の町医者であり、戦後、城南町長まで務めた政治家でもありましたが、それ以上に、九州縄文時代研究の基礎を作った考古学者として有名です。弥生文化研究に大きな影響を与えた森本六爾等、東京考古学会のメンバーとも親しく交流していたことを、全国の考古少年に夢を与えた藤森栄一が紹介しています。

そんな小林が球磨郡五木村にある頭地下手遺跡を調査したのは1940（昭和15）年のことでしたが、この調査に尽力し、共同で調査したのが高田素次でした。高田が本格的に考古学の研究を始めた1935年から数えて５年後のこと。調査では、縄文時代の後期の、市来式や出水式、北久根山式、鐘崎式等の土器や、石鏃や磨製石斧、石錘、磨石、石皿などの石器がたくさん見つかりました。山間地の縄文時代遺跡がどのようなもので、当時の人々が山間のムラでどんな暮らしをしていたのか、等々を考えさせる調査は、大成功のうちに終りました。

須恵器を見る高田素次

写真：『水上村史』より

千人塚で　中央が高田、右端が坂本經堯、その中が熊十じいさん

坂本經堯と水上村千人塚

坂本經堯（1887－1971）は、菊池郡住吉村（現、泗水町）日吉山王神社の神官の家に生まれました。日吉山王神社の神官の傍ら、住吉尋常小学校、菊池西部農業学校などで教鞭をとりましたが、それ以上に、熊本の考古学研究の基礎を作った一人の研究者として有名です。

そんな坂本と高田素次との出会いは、坂本が「人吉盆地周縁の史前遺跡を訪ねて」と題する調査旅行を行った1935（昭和10）年8月のことです。この時、坂本は、調査のため、高田とともに球磨郡水上村の千人塚を訪れました。その時のことを高田は、『水上村史』に次のように書いています。

私は、昭和十年の八月十八日に、坂本経堯先生のお伴をして、この千人塚に来た時のことを思い出した。あの時は確かにこの元野部落のあたりで、縄文式の土器数片を採集し、そのある物には短直線文が施されていたのを忘れないが、まるで石器時代のままのような家の中から、それこそ石器時代人のような顔の渕上熊十ぢいさんが、のっそりと出て来て私たちを迎えてくれた時のおどろきと喜びは、その時の記念写真にそのままのこっている。

高田は、この調査に同行して、坂本から縄文式土器について学びました。以後、高田は、考古学研究にのめり込んでいきました。千人塚の調査は、高田の考古学研究の原点ともいえるでしょう。

偶然との出会いを大切に～石清水式土器発見秘話～

高田素次（たかたもとつぐ）の石清水（いわしみず）式土器発見の話は感動的です。

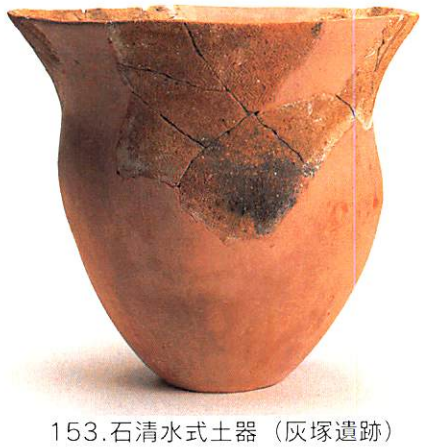
高田は、病院に入院する令夫人を見舞うために自転車をこいで人吉に向かっていました。その道すがら、人吉（ひとよし）町（現、人吉市）の石清水の道路工事現場を通りかかったところ、断面に顔を出す山形（やまがた）の押型文（おしがたもん）土器が高田の目に入りました。高田は、自転車から降りて、すぐに掘り始めました。当然シャベルはありません。近くにあった竹を拾って、それをヘラにして掘り進めました。そして、3時間の格闘の末、通りかかった令嬢の助けも受けながら、ようやく掘り出せました。お見舞いは当然ながら大幅な遅刻。令夫人は、少々御立腹気味でしたが、掘り出した土器を見せられるや、心から喜びました。

そんなエピソードを、高田は、「一尺の差」として紹介しました。

ところでこの「一尺の差」とは、どんな差なのでしょうか。

高田は、その「一尺の差」に感動しました。それは、道路の路線が「一尺」でもずれていたならば、その土器が残らなかったからです。たまたまそこに道路が通ることになり、その結果、断面に土器が顔を出し、半分だけでも高田の手元に残ることになりました。高田は、そんな偶然を「一尺の差」と表現して、感動してみせたのでした。

152.石清水式土器（石清水遺跡）



153.石清水式土器（灰塚遺跡）

石清水式土器とは？

小林久雄（こばやしひさお）は、人吉市石清水遺跡で高田素次が発見した押型文土器を1939（昭和14）年刊行の『人類学先史学講座』の中で石清水式として紹介しました。その特徴を小林は、「口縁に近く環行する横直線がある外は、口縁より底部に至るまで一面に山形連続文が施され、内面にも口縁に近い部分に同種文様が附せられ」、「形態は稍大きな深鉢形で口縁は外曲し、 胴部には上下二個所に膨みがあり、底部は平底で上げ底になつてゐる」と説明しました。ところが、この土器型式については、その後積極的に取り上げられません。その理由は分かりませんが、もったいないことです。

南九州の手向山（たむけやま）式土器によく似た文様、底の形から、手向山式と同じ時期の中九州の土器型式と考えられます。押型文土器の移り変わりを説明するうえで、とても便利な土器型式です。

一尺の差（自著『嘘のような本当の話』所載）

木上村から川村の柳瀬を通って、観音寺の裏に真直に通ずる県道が、頂度その頃工事中のことだったから、さうさうあれからもうかれこれ三四年は立っていよう。

丁度その頃腎臓炎で入院していた妻を見舞うべく、久しぶりで自転車に乗って、私は人吉へ出かけて行ったのだったが、その途中、その工事場を通りかかったのだった。

柳瀬から真直に来た新道が、旧道と落合って湯前線の陸橋を渡ろうとする僅か手前の所まで来た時である。北側の断層—と言っても、実は畑だった所が一間半程掘りさげられたために出来た一種の地層の断面なのである—に、土器の破片みたいなものが、ちらちらッと眼に映ったのであった。

自転車の上からのことではあったが、ほんの一瞬、それが土器であることを直感して、自転車を飛びおり、竹べらを拾って掘ってみると、それがまたすばらしい、これまでに郡内ではまだ一片も見つかっていなかった山形押型文の、然も完形を復元し得るだけの大きなしろものであったのには、何とも言い様のない驚ろきと喜びでいっぱいだったのだった。そのため、妻との約束の時間を三時間もおくらしてしまつて、さんざん叱言をくったあとで、そっとハンドバックをひらいて、土器のかけらを山ほど出して見せた時は、心から喜こんでくれた妻だったが、今になって考へてみると、あの時のあの嬉しそうな顔が妻の最後の顔だったのである。

ところで、なぜそう三時間もかかったかというと、第一壊れない様にと入念に少しづつ竹べらで掘りにかかったのだったが、地表下三尺五寸ほどのかたい粘土みたいな層の中にうまってゐるのではあり、シャベルなしでそれを掘り取るといふことは、ずゐ分無暴でもあったのであった。もしもあの時あの令嬢が—前に言ふのを忘れたが、実はこの時丁度道を通りかかった名も知らない令嬢があつて、一生懸命竹べらで掘って加勢してくれたのだった—加勢してくれなかったら、私はもっとおくれて夕方頃しか病院へは行けなかったのだったかも知れない。

妻を亡くしてすでに三年になるが、この頃余計に私はあの時の令嬢が思い出されるのである。

それはさうと、あの県道がもしも今一尺南寄りに測量されてゐたならば、恐らくあの鉢型土器は完全に掘りとられ、あの様に真半分が切りとられはしなかったかも知れないと同時に、また一生我々の眼にはつかなかったのかも知れない。がまたもう一尺北に寄ってゐたとしても、それこそ恐らくあの土器は一かけも残らず道路の下に掘り込まれてしまってゐたかも知れない。一尺どちらに寄っても我我は結極はあの土器を見ることは出来なかっただろう。丁度あの土器の埋ってゐた場所が半分でも道路にかかったお蔭で、半分でも残されたのだったといふことを泌々と考へたのだった。

完全無缺の土器といふ物はほとんどない。一片のかけらが我々には極めて大事なものである。あの土器も完形を復元し得るだけ残ってゐたばかりに、今度出版される『先史学人類学講座』に石清水式土器として入れられるのではないか。我等も人間のかけらにすぎないが、かけらばかりが集ってこの世の中を形成してゐるのだとすれば、一人の人間も大切なひとかけであるのであり、土器のかけらが一かけ一かけ集って原形が復元され、一かけ一かけ綜合されると一つの仕事が出来上る様に、かけらばかりの人間もうまくつぎ合され、綜合されたら大きな仕事が出来上るのだ。けれどもそれは土器の様にあぶないあぶないつぎものではない。カゼインの代りに日本精神が日本人の一人一人をつないでくれてゐるのだと思ふと、このひとかけの人間が実に尊いものであることを思ってしみじみとさせられるのである。

（「日本談義」・第三号・十三年七月掲載）

郷土に誇りを持とう～免田式土器登場秘話～

免田式土器は、弥生時代後期の土器です。ソロバン玉のような形の胴に、やや開き気味にのびる円筒状の長頸がつく、とても特異な形をしていて、胴部の上半部には、細い棒で引いた、重弧文や半重弧文、鋸歯文、綾杉文など、装飾性豊かな文様が付けられています。文様の中でも重弧文が一番多いことから重弧文土器とも呼ばれています。

この免田式土器は、球磨郡内の町、免田という名が付けられた土器です。それも、球磨郡免田町（現、球磨郡あさぎり町免田）出身の乙益重隆が名付けに係わっているところが面白いと思います。

乙益が書きました「免田式土器名付けの由来」によりますと、当時、『弥生式土器聚成図録』の解説論文を執筆した京都大学の小林行雄が乙益に、

重弧文の文様を描く土器は、弥生文化の前期にもあり、中には縄文式土器にも描かれている。ついては、従来重弧文土器とよばれているものの名称を、かえてはいかがだろうか。それについては、他の土器様式名と同じように、遺跡名をつけたがよいと思うが

という相談があったそうです。乙益は、いろいろと悩んだ末、

免田式と名付けてはいかがでしょうか

と答えました。免田は、乙益が生まれ育ったところです。

およそわが国の弥生式土器には全国にわたって、約一六〇種にのぼる様式名が設定されている。中でも、歴とした独立町村名を付した土器様式は、免田式土器だけではなかろうか。

と書いた乙益は、誇らしげでもあります。

乙益が故郷免田に寄せる思い、郷土に誇りを持っていたことが良く分かるエピソードです。

154.免田式土器（本目遺跡）

155.免田式土器（本目遺跡）

156.免田式土器（本目遺跡）

157.免田式土器（本目遺跡）

158.長頸壷（本目遺跡）

前列左から4番目が高田素次、右へ直良信夫、坪井良平、大場磐雄、1人おいて樋口清之、酒詰仲男。2列目左から3人目山内清男、1人おいて篠崎四郎。最後列左から杉原荘介、吉田格、2人おいて乙益重隆、江坂輝弥。

写真：『しらがね帖』より

考古学者大集合～東京考古学会～

高田素次は、1939（昭和14）年、上京しました。それは、東京考古学会の第１回総会（1月8日開催）で「重弧文土器について」を発表するための上京でした。この時の写真に、前列左から4番目に座る背広姿の高田がいます。またこの写真には、直良信夫、坪井良平、大場磐雄、樋口清之、酒詰仲男、山内清男、篠崎四郎、杉原荘介、吉田格、乙益重隆、江坂輝弥ら、居並ぶ当代一流の考古学者たちの顔が見られます。

球磨から単身東京考古学会に乗り込んだ高田。おそらくは、無事発表し終えた高田の顔は、自信に満ち溢れていたことでしょう。そんな高田のバイタリティーの源は、『球磨上代文化資料集成』で窺える、ほとばしる郷土愛、人間愛であり、当時東京で考古学を学んでいた乙益重隆への期待を込めた暖かな眼差しとライバル意識にあったことでしょうし、生活環境に恵まれなかった、彼のひたむきな学問への志向にあったことでしょう。

なぜ旧石器は残った～旧石器発見秘話～

高田素次は、先土器時代の石器の発見に執念を燃やしました。それは、考古学者として球磨の始原を探求する、ある意味での彼にとっては研究最後の到達点でした。「イモゴ層」の下への飽くなき探求は、そうした高田の思いを良く表しています。

高田は、1970（昭和45）年9月、球磨郡免田町（現・あさぎり町免田）の五本松に立ちました。そこでは、国道バイパス工事がおこなわれていました。そこで、高田は、軟質黄褐色土層の断面から石器を見つけたのです。その軟質黄褐色土層は、押型文土器や撚糸文土器が見つかる黒褐色土層の下にある、土器が見つからない地層です。高田は、

> イモゴの年代は今はもう一万年よりあとであろうとなかろうと、それはどうでもよい。黒褐色土層の文化相と黄褐色土層の文化相が、縄文時代と無土器時代を分ける目盛りのようなものであるとするならば、急ピッチをあげて進行中の道路工事に先がけて、正式な緊急調査が必要であることを、イモゴ層の下から私は叫びたい。

とふりしぼるような声をあげています。高田は、先土器時代の探求が球磨の研究にとって如何に必要不可欠なものなのかを強く意識していますし、先土器時代研究において球磨が全国的に注目されている現状を予言しているかのようでもあります。

そんな中で、ある石器が見つかりました。1973（昭和48）年、当時深田小6年の中武修がそれまで掘り出したこともない真っ黒な石を砂礫層の中から見つけました。中武少年は、当時深田中の生徒であった姉に見せました。姉は、すぐに社会科の樅木譲に見せました。樅木も、良く分かりません。そこで石の専門家である、教頭の原田正史に見せました。

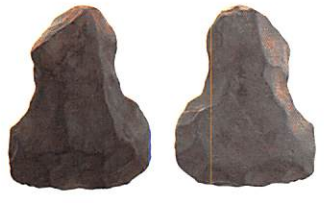
とても古い石器の可能性が高い、その石器は、今でも原田のもとにあります。では、なぜこの旧石器は残ったのでしょうか。

それには、遺跡への強烈な思いとともに、断ち切られることのない人と人との触れ合いが係わっています。仮に場面場面での人と人との触れ合いが断ち切られていたとしたら、おそらくこの旧石器は、残らなかったはずです。

この旧石器は、そんな人と人との触れ合いの大切さを教えてくれているようです。

159.旧石器（下里遺跡）

160.旧石器（五本松遺跡）



161.旧石器（矢岳遺跡）

イモゴ層の下から(自著『嘘のような本当の話』所載)

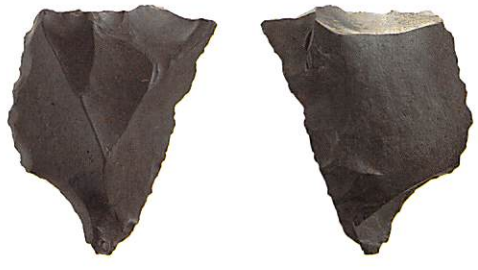
球磨地方、特に上球磨地方は至るところにイモゴ層が地下をおおっているが、地学をやっている人たちは、このイモゴ層は、霧島火山の噴火によって出来たもので、一番新しいものでも、今から一万年は前のものだといっている。無論、ところによって厚さに多少の違いはあるようだが、だいたいにおいて三〇糎前後の厚さをもっているようだから、三〇糎も灰の堆積をつくった噴火というと、どのくらいひどいものであったかは想像もつかないけれども、そのころすでに上球磨地方には人が住んでいたらしく、このイモゴ層の中に縄文期の土器や石器を残しているのである。しかしもしもこの大噴火よりも前からこの地方に人がいたとすれば、このイモゴ層の下からも当然何らかの遺物が出てもよいわけである。多良木中学の林幹彦氏から、免田町の五本松遺跡では、このイモゴ層の下からも確かに土器が出るということを知らされたのはよほど前のことだったが、それ以来私の夢はこのイモゴ層の下にかけられて来たのであつた。

五本松一帯のイモゴ層は三〇糎ほどの厚さがあり、その下に四〇糎ほどの黒褐色土層があり、その下に軟質の黄褐色土層があるのだが、土器はこの黒褐色土層の中からだけ出るらしく、それはほとんど押型文と、より糸文に限っているようである。しかし黄褐色土層からこれまでには土器は全く見当つていないのであつた。

ところが、たまたまはじまつたバイパスの道路工事は、その五本松遺跡をイモゴ層どころか、ずっと深い硬質黄褐色土層の下までも掘りくずしはじめたのである。

九月二十四日(昭和四十五年)の午後であった。私は掘りとられた軟質黄褐色土層の断面から、思いがけなくも数個の黒燿石片と、一個の硬質頁岩で出来た、明らかに加工された石器を発見したのだが、更に二十六日、二十九日と同地を訪れ、さらに数個の黒燿石片を同層中から採集したのであった。もしもこれらが無土器時代の遺物であるとするならば、この土層につづく黒褐色土層から発見されている縄文の石器と、どのようにつながるものであるか、縄文期の石器にはなぜ硬質頁岩を用いたものが見当たらない(或いは少ない)のであるかなど、興味深いものがあるように思われる。イモゴの年代は今はもう一万年よりあとであろうとなかろうと、それはどうでもよい。黒褐色土層の文化相と黄褐色土層の文化相が、縄文時代と無土器時代を分ける目盛りのようなものであるとするならば、急ピッチをあげて進行中の道路工事に先がけて、正式な緊急調査が必要であることを、イモゴ層の下から私は叫びたい。

(能本日日新聞・四十五年十月十日掲載)



五本松遺跡で高田が見つけた硬質頁石の石器

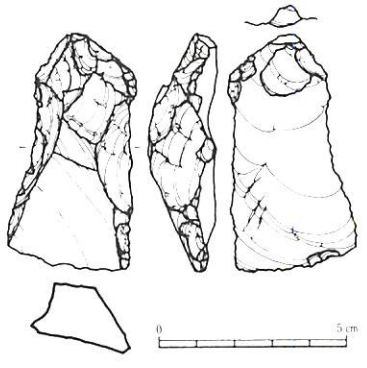
深田小学校裏手崖産出の旧石器について

昭和48年（1973）、給食室建築工事のために切断露出した校地裏手の高さ約1.6mの砂礫層の基部で、数人の友人と一緒に砂礫層から榛をほじくり出して遊んでいた、当時深田小学校の６年生だった中武修君は、それまで掘り出した礫とは色も形も全く違った真っ黒で異様な岩片を手にしました。これが出土層が明確なものとしては県下最古と判断される旧石器の発見だったのです。

たまたま深田中学校の生徒だった修君の姉さんが、社会科の授業で石器の話を聞いて、先日弟が持ってきた石も石器かも知れないと思い学校へ持参しました。岩片の提示を受けた社会科担当の樅木譲教諭は、私は石のことは分からないから教頭さんに持って行くようにと指示されたのでした。当時深田中の教頭だった私は、岩片が深田村に存在しない黒色珪質頁岩であって、自然状態での砂礫層への混入は地形的に絶対不可能であること、岩片の縁辺部に人為的な整形加工を意味する打撃痕が連続して明瞭に認められ、表面の一部にこれも人為的な加工と思われる平滑面が形成されていること、更には砂礫層が加久藤溶結凝灰岩上に位置し、砂礫層上部に姶良（入戸）火砕流堆積層であるシラスが存在するという地質学的事実から、この岩片を旧石器であると断定し発表しました。

シラスと加久藤溶結凝灰岩の科学的測定年代が、それぞれ2.5万年前と30万年前とされることから、深田小産旧石器が2.5万年前より古く、30万年前より新しいことは当然のことながら、砂礫層基部からの産出であることを考慮すると、漠然としたものではあっても30万年前の方により近いとする判断が成立します。なお砂礫層基部には、加久藤火砕流の堆積時に由来すると思われる大小多数の軽石円礫が混在しており、前記判断を側面的に補足するものと考えます。いずれにしても、日本最古の可能性まで保有する旧石器が現存し得た偶然の重なりに、深い感銘を覚えずにはいられません。

（日本地質学会会員　原田正史）



自分の郷土に感動しよう

高田素次は、考古学のみならず、民俗学、歴史、郷土研究、短歌、俳句など、幅広い分野で、その才能を思う存分発揮しました。球磨に伝わる昔話の掘り起こし、ウンスンカルタの遊び方の復元、真宗禁制とかくれ門徒の掘り起こし、種山石工橋本勘五郎の掘り起こし、球磨が生んだ偉人の掘り起こし、球磨の自然を詠ったたくさんの短歌や俳句等々。そこに溢れるのは、自分自身を育んでくれた郷土、球磨の自然や文化、人々への感謝を込めた表現でした。それは、溢れんばかりの郷土愛、人間愛をそこに感じ取ることができるのです。高田は、彼自身の郷土愛、人間愛を数々の作品の中に散りばめていたのです。そのことがよく分かる表現を『球磨上代文化資料集成』の序文に見つけます。1938（昭和13）年。彼が活動を始めた頃の、彼のふりしぼるような叫びのようでもあります。

私はこれによって郷土といふものが幾分かでも強く認識され愛され研究家の研究資料になるものがあるとすればそれでいいと思ってゐる。

然し今の私はただ郷土から離れたくない心で一杯である。球磨上代の文化のすばらしさをおもう時これほどありがたい球磨の天地にどうして後がむけられよう。

私が今までにたいした屈曲もなく通して来得たのは一つにはこの土器と石器とのおかげであったことを思ふ時、つまらないとは思ひ乍らもかういふものを世に出すといふことは矢張り遺物に対する感謝の心からでもあり、遺蹟地に対する愛からでもあるのである。私は土器と石器によって育てられて来た。

こうした高田にあてて、高群逸枝が贈った句、「しらが岳君ありて冬を輝ける」は、高田のそんな魅力に対する最大の賛辞です。

高田は、郷土の自然や文化、人々への感謝、そしてそれらに感動する心の大切さを教えてくれているようです。

皆さん、私たちも路傍の石仏や身近な自然に触れ、そこに先人たちを重ねながら、皆さんの郷土の自然や文化の奥深さに感動してみませんか。

高群逸枝のこと

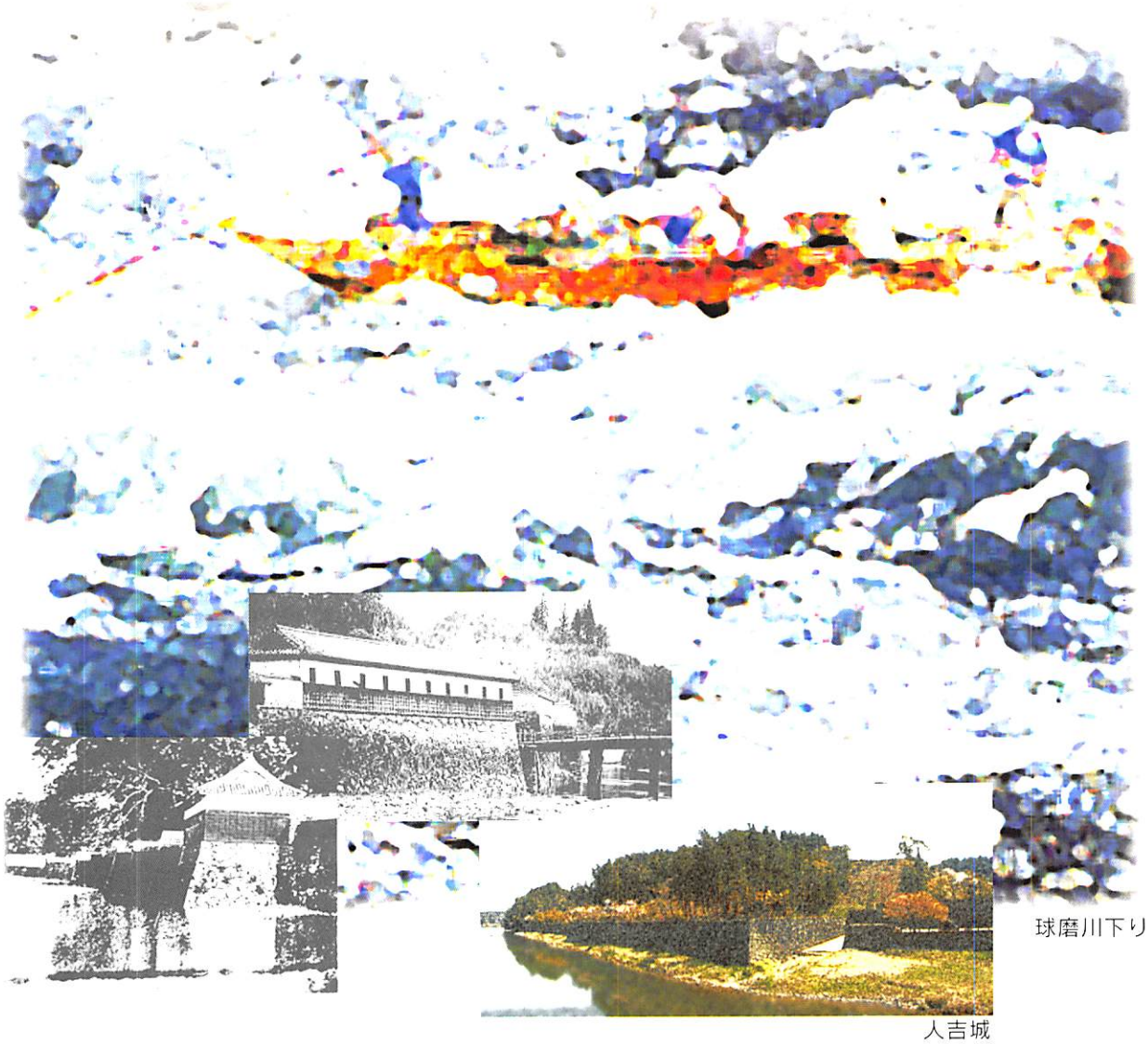
1894（明治27）年、下益城郡豊川村（現、松橋町）生まれ。しばらく小学校の教師をしていましたが、1921（大正9）年に上京しました。そして「日月の上に」、「放浪者の歌」、「美想曲」などの詩集を刊行し、詩人として文壇にデビューをしました。その後、平塚らいてう等と無産婦人芸術連盟を結成し、婦人解放運動に情熱を燃やします。しかし、やがてその運動に不満を感じることとなり、1931（昭和6）年、東京郊外の森の中で、女性史研究に没頭しました。「母系制の研究」、「招婿婚の研究」等の著作を残すなど、女性史研究にすぐれた業績を残しました。

ゾーンⅣ「エピローグ」

感動はあらゆる人に活力を与えます。
「路傍の石仏」に感動し、そこに遠い昔の人たちのことを思えば、……。
郷土の歴史の奥深さに感動せざるを得ません。
そんな感動が、かけがえのない遠い昔の人たちの息吹きと自らの生命（いのち）を感じさせてくれるのです。
そんなことを考古学者たちは、身をもって教えてくれました。

そんなすばらしい球磨の考古と歴史に触れてみませんか。

そして、その中で、皆さんの郷土に立ち戻り、郷土への愛情を再発見してみませんか。



球磨川下り

人吉城

「球磨楽展」関係略年表

		時代	内　容	球磨に遊ぶ			球磨に学ぶ
				活きる	祭　る	集　う	
前30000	原始	先土器	姶良Tn火山灰降る（24000年前）	野々脇			下里 矢岳 五本松
前10000	原始	縄文	土器作り始まる アカホヤ火山灰降る（6400年前） 水稲耕作始まる	頭地田口A 小浜 逆瀬川　野原	灰塚 白鳥平A 大丸・藤ノ迫 中堂	尾鉢 米山	石清水 灰塚 頭地下手
前300 前200 前100 0 100 200 300	原始	弥生	鉄や青銅の道具伝わる 100余りの国に分れる 光武帝「漢委奴国王」を受印（57） 卑弥呼、魏に使いを派遣、倭王を拝命（239）	頭地田口B	別府 新深田　夏女 市房隠　金山 高ノ原　井沢　入口 才柿　本目	ヤリカケマツ 本目	市房隠 本目
400 500 600 700	古代	古墳	倭王武南朝に朝貢（478） 「倭の五王」の時代 筑紫国造、碧井の反乱（527） 大化の改新（645） 藤原京遷都（694）	頭地田口B 千人塚古墳群	本目	本目	千人塚古墳群 大村横穴群
1200	古代	奈良 平安	平城京遷都（710） 平安京遷都（794） 源頼朝が征夷大将軍に（1192）			下り山古窯跡	
1600	中世	鎌倉 室町	足利尊氏が征夷大将軍に（1338）				
	近世	江戸	徳川家康が征夷大将軍に（1603）		頭地松本B		

出品目録

Ⅱ 球磨に遊ぶ

活きる

No.	資料名	遺跡名	数量	時代・時期	口径・高(cm)等	指定等	出品協力者
1	ナイフ形石器	野々脇	1	先土器時代	長5.2・幅1.7		五木村教育委員会
2	岩本式土器	頭地田口A	1	縄文時代早期	19.0・33.0		熊本県教育委員会
3	尖底無文土器		1		38.4・52.9		
4	壷	頭地田口B	1	弥生時代後期～古墳時代前期	胴径21.6・21.0		五木村教育委員会
5	壷		1		〃14.6・(14.1)		
6	台付甕		1		24.0・40.5		
7	高杯		1		34.5・18.6		
8	阿高式土器	逆瀬川	1	縄文時代中期	25.5・1.2		五木村教育委員会
9	阿高式土器		1		30.0・27.3		
10	南福寺式土器		1	縄文時代後期	40.0・(23)		
11	出水式土器		1		19.2・16.2		
12	出水式土器		1		13.7・(12.7)		
13	出水式土器		1		28.0・(20)		
14	市来式土器		1		15.5・(12.8)		
15	市来式土器		1		13.3・14.2		
16	無文深鉢形土器		1		27.7・23.7		
17	無文浅鉢形土器		1		14.0・8.0		
18	鐘崎式土器		1		21.8・11.5		
19	小型壷形土器		1		8.4・10.6		
20	透し入り底部		1		底径13.5・－		
21	特殊注口土器		1		径12.3・(6.7)		
22	礫石錘		10	縄文時代中期～後期	－		
23	礫石錘	頭地田口B	5		－		
24	磨製石斧	逆瀬川	6		－		
25	磨製石斧(鑿形)		6		－		
26	石鏃		13		－		
27	石匙		6		－		
28	磨石、石皿		6、2		－		
29	阿高式土器	野原	1	縄文時代中期	29.0・33.5		相良村教育委員会
30	阿高式土器		1		20.0・17.9		
31	南福寺式土器		1	縄文時代後期	27.0・26.0		
32	出水式土器		1		36.0・－		
33	出水式土器		1		－		
34	出水式土器		1		31.0		

No.	資料名	遺跡名	数量	時代・時期	口径・高(cm)等	指定等	出品協力者
35	南福寺式土器	野原	1	縄文時代後期	12.8・11.8		相良村教育委員会
36	出水式土器		1		10.0・9.8		
37	出水式土器		1		13.0・13.7		
38	出水式土器		1		17.2・17.7		
39	阿高系土器		1		18.0・－		
40	無文深鉢形土器		1		13.5・15.1		
41	南福寺式土器(浅鉢)		1		－		
42	南福寺式土器(浅鉢)		1		18.2・6.8		
43	南福寺式土器(浅鉢)		1		14.2・5.1		
44	市来式土器		1		24.0・23.7		
45	市来式土器		1		30.6・27.9		
46	市来式土器		1		(18.8)・－		
47	市来式土器		1		15.4・－		
48	鐘崎式土器		1		－・10.7		
49	注口土器		1		－		
50	礫石錘		1	縄文時代中期～後期	長5.6・幅4.7		
51			1		〃5.7・〃7.7		
52			1		〃4.9・〃7.0		
53			1		〃5.0・〃7.05		
54			1		〃5.65・〃8.25		
55			1		〃3.9・〃8.7		
56	磨製石斧		1		〃9.2・〃4.3		
57			1		〃12.5・〃5.05		
58			1		〃12.6・〃5.1		
59	石鏃		1		〃(5.65)・〃2.2		
60			1		〃(3.4)・〃(1.4)		
61			1		〃2.05・〃(1.35)		
62			1		〃1.65・〃1.35		
63			1		〃(2.45)・〃(1.65)		
64			1		〃2.35・〃1.75		
65			1		〃2.35・〃1.6		
66			1		〃1.5・〃1.1		
67			1		〃1.6・〃1.35		
68			1		〃1.6・〃1.95		
69	石皿		1		〃34.7・〃27.95		
70			1		〃36.4・〃(17.9)		
71			1		〃38.2・〃(22.4)		

No.	資料名	遺跡名	数量	時代・時期	口径・高(cm)等	指定等	出品協力者
72	磨石	野原	1	縄文時代中期～後期	長10.15・幅9.9		相良村教育委員会
73			1		〃10.4・〃9.4		
74			1		〃10.1・〃8.45		
75			1		〃11.3・〃9.4		
76			1		〃9.9・〃7.55		
77	阿高式土器	小浜	1	縄文時代中期	径49.7高45.4		五木村教育委員会
78	阿高式土器		1		〃24.3〃22		
79	須恵器提瓶	千人塚古墳群	1	古墳時代後期	高20.8・幅16・8		水上村教育委員会
80	須恵器提瓶		1		〃23.0・〃17.2		
81	須恵器横瓶		1		〃28.5・〃37.0		
82	金環・銀環		3		－		
83	鉄刀		1		長45.7・幅5.0		

祭る

No.	資料名	遺跡名	数量	時代・時期	口径・高(cm)等	指定等	出品協力者
84	長頸壷	井沢	1	弥生時代後期	胴径20.5・29.8		相良村教育委員会
85	免田式土器	入口	1	弥生時代後期	〃19.7・26.5		
86	免田式土器	不明	1	弥生時代後期	〃14.8・－	町	あさぎり町教育委員会
87	免田式土器	市房隠	1	弥生時代後期	〃37.0・42.5		個人蔵
88			1		〃(22.0)		個人蔵
89	免田式土器	金山	1	弥生時代後期	〃13.5・9.5		個人蔵
90	免田式土器	高ノ原	1	弥生時代後期	〃14.7・(19・6)		あさぎり町教育委員会
91	免田式土器	新深田	1	弥生時代後期	〃(19.5)・－		
92			1		〃29.2・40.5		
93	免田式土器	才柿	1	弥生時代後期	〃22.2・(34.0)		個人蔵
94	壷	夏女	1	弥生時代後期	14.4・(30.0)		熊本県教育委員会
95	高杯		1		29.8・(12.7)		
96	台付甕		1		41.9・46.5		
97	台付甕		1		24.3・34.2		
98	台付甕		1		17.4・(54.5)		
99	免田式土器		1		胴径27.9・(30.4)		
100	免田式土器		1		〃26.6・13.0		
101	免田式土器		1		〃27.5・(17.0)		
102	壷		1		〃39.6・59.3		
103	高杯		1		33.0・－		
104	鉢		1		31.4・25.8		
105	台付甕		1		38.8・(41.2)		

No.	資料名	遺跡名	数量	時代・時期	口径・高(cm)等	指定等	出品協力者
106	ミニチュア土器	夏女	28	弥生時代後期	−		熊本県教育委員会
107	石包丁		5		−		
108	免田式土器	本目	1	弥生時代後期	胴径23.4・−		あさぎり町教育委員会
109	免田式土器		1		〃28.0・−		
110	免田式土器		1		〃28.2・−		
111	免田式土器		1		−		
112	免田式土器		1		〃19.5・−		
113	免田式土器		1		〃21.0・−		
114	長頸壷		1		〃17.0・−		
115	高杯		1		〃24.5・−		
116	高杯		1		〃34.8・14.3		
117	小型丸底土器		3		−		
118	線刻礫	大丸藤ノ迫	1	縄文時代早期	長8.8・幅7.1		熊本県教育委員会
119	線刻礫	別府	1	弥生時代	長4.8・幅5.0		熊本県教育委員会
120	一字一石経	頭地松本B	5	江戸時代	−		熊本県教育委員会
121					−		
122					−		
123					−		
124					−		
125	勾玉、管玉、異形勾玉等	中堂	12	縄文時代晩期	−		人吉市教育委員会
126	小型浅鉢形土器		1		14.3・8.6		
127	小型深鉢形土器		1		16.2・14.3		
128	小型深鉢形土器		1		11.2・8.8		
129	小型浅鉢形土器		1		15.0・17.2		
130	壷形土器	灰塚	1	縄文時代早期	径25.0・37.0		熊本県教育委員会
131	耳栓		4		−		
132	耳栓	白鳥平A	2	縄文時代早期	−		熊本県教育委員会
133	石製品		2		−		

集う

No.	資料名	遺跡名	数量	時代・時期	口径・高(cm)等	指定等	出品協力者
134	阿高式土器	米山	1	縄文時代中期	28.0・26.5		熊本県教育委員会
135	細型銅剣	ヤリカケマツ	1	弥生時代	長21.5・幅2.8		熊本市立博物館
136	刻銘入り須恵器	下り山古窯跡	1	平安時代			熊本県教育委員会保管
137	鉢	本目	1	弥生時代後期	10.8・10.6		あさぎり町教育委員会
138	器台		1		13.8・17.0		
139	高杯		1		−		

No.	資料名	遺跡名	数量	時代・時期	口径・高(cm)等	指定等	出品協力者
140	高杯	本目	1	弥生時代後期	30.6・19.2		あさぎり町教育委員会
141	吉備系長頸壷		1	弥生時代後期	胴径20.1・?		
142	長頸壷		1	弥生時代後期	〃17.6・(18・0)		
143	船元式土器	尾鉢	1	縄文時代中期	27・0・(18.5)		個人蔵

Ⅲ 球磨に学ぶ

No.	資料名	遺跡名	数量	時代・時期	口径・高(cm)等	指定等	出品協力者
144	高田素次著作物						個人蔵
145	黒川式土器	不明	1	縄文時代晩期	9.8・6.0		個人蔵
146	免田式土器	市房隠	1	弥生時代後期	19.0・(12.0)		個人蔵
147	浜田博士の詫び証文		1		縦16.9・横17.2		個人保管
148	浜田博士提供須恵器		1	古墳時代	13.0・3.5		
149	蕨手刀	大村横穴群周辺	1	古墳時代後期	長39.2・幅4.5		
150	蕨手刀箱		1		縦39.9・幅18.6		
151	頭地下手遺跡土器	頭地下手		縄文時代中期～後期	－		個人蔵
152	石清水式土器	石清水	1	縄文時代早期	?・37.0		個人蔵
153	石清水式土器	灰塚	1	縄文時代早期	38.0・(27.3)		熊本県教育委員会
154	免田式土器	本目	1	弥生時代後期	径17.5・(29.0)		個人蔵
155			1		径24.0・(17.8)		
156			1		径18.8・(21.0)		
157			1		－		
158	長頸壷		1		径13.0・19.5		
159	旧石器	下里	1	先土器時代	長6.3・幅3.2	町	個人蔵
160	旧石器	五本松	1	先土器時代	長8.2・幅5.6		個人蔵
161	旧石器	矢岳	1	先土器時代	長10.5・幅8.1		

参考文献

五木村教育委員会1995『野々島遺跡』
五木村教育委員会1998『小浜遺跡』
五木村教育委員会2003『逆瀬川遺跡』
五木村教育委員会1997『頭地田口Ｂ遺跡』
木﨑康弘1984「弥生時代の集落と免田式土器の二つの姿」『肥後考古学会・鹿児島県考古学会連合学会資料』
木﨑康弘1995「第二編　須恵村の歴史　第一章　原始」『須恵村誌』
木﨑康弘1996「第一章　原始古代」『相良村誌』
木﨑康弘1998「中九州西部押型文土器の編年」『九州の押型文土器－論攷編－』
熊本県教育委員会1980『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』
熊本県教育委員会1986『大丸・藤ノ迫遺跡』
熊本県教育委員会1993『夏女遺跡』
熊本県教育委員会1993『白鳥平Ａ遺跡』
熊本県教育委員会 1995『無田原遺跡』
熊本県教育委員会1996『沖松遺跡』
熊本県教育委員会1997『堂園遺跡・中尾遺跡・別府遺跡』
熊本県教育委員会2002『頭地田口Ａ遺跡』
熊本県教育委員会1997『頭地松本Ｂ遺跡（１）』
小林久雄 1939「九州の縄文土器」『人類学先史学講座』11
小林久雄 1967「肥後国球磨郡五木村頭地下手遺跡」『九州縄文土器の研究』
小林久雄 1967『九州縄文土器の研究』
坂本經堯1982『肥後上代文化資料集成』
高田素次1938『球磨上代文化資料集成（目録）』
高田素次1986『しらがね帖』
高田素次・乙益重隆1937「肥後国免田町本目出土の弥生式土器」『考古学』8-11
鶴嶋俊彦1995「第二編　須恵村の歴史　第二章　古代」『須恵村誌』
人吉市教育委員会1993『中堂遺跡』
深田村教育委員会1999『高ノ原遺跡』
松舟博満 1990 「手向山式土器の壺について」『肥後考古』 7
免田町教育委員会1996『本目遺跡　１次・２次発掘調査報告』
免田町教育委員会2001『本目遺跡　３次～５次発掘調査報告』

＊引用文献については、引用部分に出典を明記しています。

熊本県立装飾古墳館
平成15年度後期企画展示

球磨楽展

肥後の至宝展Ⅱ～球磨の考古と歴史に遊ぶ～

発行日：2004年1月18日
編集：熊本県立装飾古墳館
〒861-0561　熊本県鹿本郡鹿央町岩原3085番地
Tel.0968-36-2151　Fax.0968-36-2120
発行：熊本県文化財保護協会
〒862-0970　熊本市渡鹿3-15-12
Tel.096-362-9491（県文化財収蔵庫内）
印刷：印刷協業組合　サンカラー
Tel.096-380-8131　Fax.096-389-0748

印刷仕様
版型／A4版
頁数／72頁
組版／フォント（10.3ポイント　明朝基本）
印刷／オフセット印刷
製版／スクリーン線数200線で製版
用紙／表紙（スーパーアート 4/6判 200kg）
　　本文（上質コート 4/6判 110kg）
製本／左無線綴じ

The Memory of Mototugu Takata

球磨楽展

～球磨の考古と歴史に遊ぶ～

http://www.pref.kumamoto.jp/construction/section/kofunkan/

15 教委 熊古
⑥ 001

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 企画展図録 第17集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：球磨楽展
発行：熊本県立装飾古墳館
〒861-0561　熊本県山鹿市鹿央町岩原3085番地
電話：0968-36-2151
URL：http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦2018年6月1日